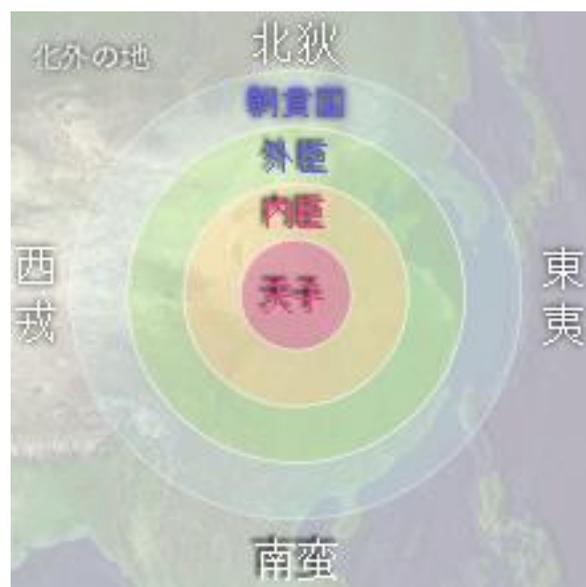


正史を彷徨う

Part III

森隆一



(Wiki「東夷」より)

Part III 序

ここでは朝鮮三国、高句麗・百濟・新羅、の王統を主に考察し、併せてそれら各王家の出自も考えていく。方法としては、まず正史を眺め、王統を調べる。続いて、三国史記の王統と比較検討を行う。これは、副次的に三国史記の信頼性の検討の第一歩になると考える。

初めに古代朝鮮の地図について述べる。Google Map では北朝鮮と韓国の範囲は地名がハングルで書かれている。観光地図では地名が漢字で表記されてはいるものもあるが、全体の地図ではない。ネットで「韓国地図コネスト」 <https://map.konest.com/> が見つかった。地名がハングルと漢字で書かれているが、大韓民国の範囲をカバーしている。

図 III01 古代朝鮮 は朝鮮から満州南西部にかけての歴史的地名を漢字で表記したもので力作であり、これに替わるものを見いだせていない。

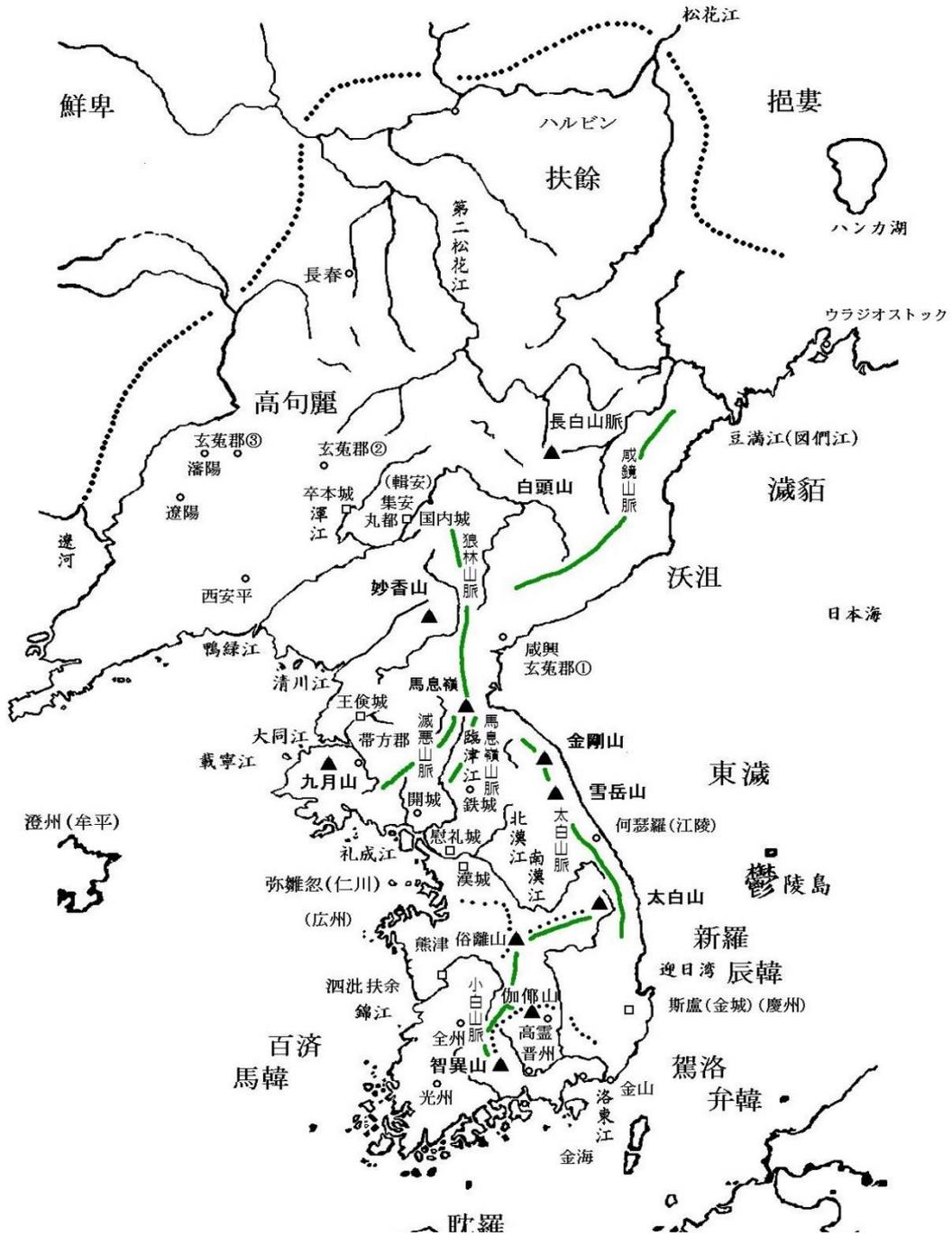


図 III01 古代朝鮮

この図は、

<http://homepage3.nifty.com/kiya/sehachi/cizu325.htm>

よりダウン・ロードしたものであるが、このサイトは現在アクセス出来ず、地図の由来に関するデータを得ることができない。

図 IIII01 の全体的な印象としては、東濊・馬韓・辰韓・弁韓を除けばかなり信頼が置けると考えている。東夷伝に現れる国はほぼ書き込まれている。大まかであるが、王險城は現在の平壤で、漢城は現在の京城である。朝鮮と対馬の間の海が金海と書かれているが、この由来は知りたいものである。

百済・新羅の位置は、6世紀から7世紀にかけては正しいと思われるが、4世紀・5世紀は、百済は京城辺りあったと考えている。新羅に関しては、5世以前はわかっていない。

山脈と大きな川は書かれている。ただし、緑の太線で表序されているため、広がりかわからない。長白山脈はこの右上から始まり、鴨緑江の下を左下まで続き遼東半島辺りに至る。現在、この山脈が中国と北朝鮮の国境である。半島部の東は太白山脈により海と遮られて、海沿いの町で咸興を除くほとんどの都市は西海岸にある。

遼東郡の郡衙は西安平の辺りと思われる。漢の軍隊は平原で騎兵の援護を受けた歩兵大部隊の戦闘であり、三国魏までは海運は重要

ではなかった。Google の写真地図を見れば、北京辺りから薄いベージュの入った緑の部分を通してほぼ平壤辺りまで到達できる。

図 IIII01 では地勢が掴めないことを補うために、国土地理院の地勢図のほぼ同じ部分をカットしたものが次図である。



図 IIII02 朝鮮半島の地勢

単単大嶺は白頭山で、蓋馬高原はその下の鴨緑江が二股に分かれている所でないかと思っているが、狼林山脈か咸興山脈の何処かかもしれない。

単単大嶺については、Wiki「狼林山脈」に次のように書かれている。

狼林山脈は、朝鮮半島北部にある山脈。蓋馬高原の西を南北に伸びている。現在は朝鮮民主主義人民共和国の慈江道から平安南道、咸鏡南道にかけて属している。狼林山脈は、北の摩天嶺山脈や、南に続く太白山脈とともに朝鮮半島の脊梁山脈(白頭大幹)の一部を成しており、西の黄海側と東の日本海側を分ける分水嶺となっている。大同江、清川江など朝鮮半島北部の大きな川はこの山脈の西側に発している。高い峰は山脈の東側に連なり、西側へ向かって低くなっている。

狼林山脈からは、1000m級の山脈がいくつか南西方向に並行して分かれている。鴨緑江の南岸を走る江南山脈、清川江に沿う狄踰嶺山脈、妙香山のある妙香山脈、そのほか彦真山脈、滅悪山脈などがこれにあたる。

ここで、今までに得られた三国の位置を図 IIII01 で復習しておこう。

高句麗は、初めは卒本城を、その後は丸都城・国内城を都としてい

た。晋の時代に(楽浪郡を滅ぼした後)楽浪郡の郡衙の王險城(平壤)に遷都した。領土は遼東半島を除く満州の東南部を主にしていた。

漢末に造られた帯方郡は楽浪郡の屯有県を郡衙とした。図 IIII01 で、大同江の河口辺りと考えている。

馬韓は漢城(京城)辺りで、辰韓はその東で太白山脈の西、現在の江原道辺りと考える。その南は倭であったと考えるが韓との境界は確定できていない。地形からは慶尚道と忠清南道以南が倭と思える。倭と接するようになったのは6国から12国となった時ではないかと考えている。

帯方郡滅亡前後百済が馬韓の地に造られ、その後辰韓とその南部を併せて新羅が成立した。百済は成立後南部への拡大と高句麗との抗争を繰り返し、6世紀頃には最後は忠清南道まで後退した。新羅は慶尚北道から慶尚南道北部を6世紀頃までには領有していたが経過は把握できていない。

6. 高句麗の王統

6.1. 高句麗概観

高句麗は紀元より少し前に成立した。都は長白山脈の西側の卒本城・丸都城が長く、後に王儉城(平壤城)を都とした。前者は朝鮮半島にはなく、満州の南東部にある。炭鉞の撫順や鉄鉞の鞍山はこの近くである。また、遼東郡を攻める話と新羅との戦闘の記事はあるが、楽浪郡を攻める話は少ない。楽浪郡へは鴨緑江と山地を越えていく必要があったことと、侵略先としては遼東郡のほうがより魅力があったのであろう。魏の滅亡の後にはまた遼東郡を取り戻し、晋の始めに楽浪郡と帯方郡を併せ、現在の北朝鮮から満州南東部及び沿海州の南部を占め最大版図となり、7世紀に唐により滅ぼされた。

ここでは、高句麗の成立と王統を主として考察する。これまでと重複するものもあるが、引用するのも煩わしいので、重複も厭わないうで再掲する。

高句麗は句麗とも書かれている。他に(通鑑言)麗王宮、(高)麗人などの用い方もある。高句麗が高氏の句麗というのは、

Wiki「北燕」に

北燕 407-436 の初代王は高句麗人の後裔で高雲とあった。

と書かれていることから、あり得るかもしれないが、高氏以外の句麗は見つかっていない。

注意 以下で引用する Wiki「高句麗」の内容は現在では大幅に改定され、ここで引用しているものは削除されているものも多い。現在の記事から引用すべきであるが、かなりの変更の必要があり、今回は、草稿のままとする。

Wiki「高句麗」名称の項に、

高句麗は別名を貊と言う。後漢書によれば、3世紀における高句麗・夫余の2国と沃沮・東濊の2部族は、すべて前漢代の濊貊の後裔である。

と書かれている。後漢書東夷伝でこの記事を確認できていない。名称はともかく、前漢時代には、上記2国2部族は単一の部族であった可能性は考えられる。あるいは、もう少し弱く、単一の部族が住んでいたと認識されていたが、武帝の衛氏朝鮮の攻略後、異なる部族であ

ることが解ってきたとも考えられる。

上記 Wiki「高句麗」国名の項に

中原高句麗碑などの碑文によれば 5 世紀中頃には高麗と自称していたことがわかる。中国の王朝がこの自称を公認したのは 520 年が最初であることが、歴代正史の冊封記事から明らかになっている。以後は高麗が正式名称として認められていた。

と書かれている。915 年から 1392 年の李氏朝鮮の成立までは朝鮮統一王朝としての高麗が続くことになる。

北史では

元封四年 BC107 武帝滅朝鮮 以高句驪為縣 使屬玄菟

武帝が朝鮮をほろぼしたとき、高句麗を県とし、玄菟郡に帰属させた。

と書かれている。BC107 年は高句麗の成立より前であることから、この高句麗は地名と考える。

Wiki「玄菟郡」では

紀元前 75 年(元鳳 6 年)になると、玄菟郡は西へ縮小移転された。郡治の高句驪県は現在の遼寧省撫順市内の東部、新賓満族自治県永陵鎮老城村(昔の興京)付近へ移され、元の場所には高句麗侯(後の高句麗王国の前身)が冊封された。

と書かれている。

BC107 年に玄菟郡が出来たとき、玄菟郡には夫租、高句驪、西蓋馬、上殷台の県があった。これが正史での高句驪の初出である。この高句麗県の主に高句麗侯の爵位が与えられた。

正史からは BC105 年に高句麗県が造られ、BC75 年に高句麗侯が冊封された。一方、高句麗本紀からは、初代東明聖王の即位は BC37 年となっている。ここで、次の疑問を設定しておく。

疑問 IIII01. BC75 年に冊封された高句麗侯と高句麗本紀の東明聖王から始まる高句麗王朝とは同じか異なるのか。

後漢書では、

王莽初 9 發句驪兵以伐匈奴 其人不欲行・・・莽大説 更名高句驪王
為下句驪侯

王莽の始め(初年)句驪に匈奴を伐つことを命じた。句驪の人は行くことを望まなかった。・・・莽は大いに喜び、高句驪王を下句驪侯とした。

建武八年 32 高句驪遣使朝貢 光武復其王号

高句麗が使いを送り朝貢した。光武帝はその称号を元の王号に戻した。

と書かれている。三国史記からは、32年の王は第3代大武神王の期間である。王莽初年の記事からは、9年には高句麗侯は高句麗王になっていたことになる。

三国志には

漢光武帝八年 32 高句麗王遣使朝貢 始見稱王

高句麗王は使いを派遣し朝貢した、これが王と称することの最初である。

と書かれてい。

この後、高句麗は大凡 700 年続いた。首都は、卒本城、丸都城、平壤城 427-668 と変わった。卒本城は現在の遼寧省本溪市桓仁満族自治県(吉林省との省境近くの鴨緑江の少し北)にあった。丸都城は平城の国内城と一体のものである。

飛鳥京と高安城も同様のものとされている。

いずれも長白山脈からその支脈の千山山脈に続く縊れ部分にある。卒本城と丸都城は西北の満州側に、平壤城は南東の(北)朝鮮側にある。この長白山脈は鉱物資源が豊かで、北朝鮮の経済的基盤となっているということである。撫順炭鉱と鞍山の鉄鉱石も長白山脈の西である。中国の王朝が相当なコストを使っても遼東半島は手放さなかったのはこの為か。

晋書には高句麗条はない。宋書では

東夷高句麗國 今治漢之遼東郡

東夷の高句麗国は、いま、遼東郡を治めている。

西晋までの王朝は遼東を支配していた。晋朝の内乱により中国の外部への圧力が衰え、北部は五胡十六国の時代となった。これに乗じて、高句麗は遼東郡・玄菟郡・楽浪郡・帯方郡を支配した。この辺りから北魏までが高句麗の最大版図であったかもしれない。

倭の五王が高句麗の狼藉により朝貢できないと訴えたのもこの時である。

6.2. 正史から

正史の記事のうち、高句麗の出自・王統と目につく風俗の記事をみていく。

出自と地勢 まずは、出自と地勢に関する記事を眺めていく。

高句驪 在遼東之東千里 南與朝鮮 濊貊 東與沃沮 北與夫餘接（後漢、三）

高句驪は遼東の東千里にあり、南は朝鮮と濊貊、東は沃沮、北は扶余と接する。

は既に見てきた。

都於丸都之下（三） 都は丸都の麓にある。

句驪一名貊 有別種 依小水為居 因名曰小水貊（三）

句驪は貊ともいう。小水のほとりに住む別種があり、小水貊という。

小水は何処にあるわからないが、小水貊は前百済と関連するかもしれないと想っている。

東夷高句麗國 今治漢之遼東郡（宋）

東夷の高句麗国は今漢の遼東郡を治めている。

東夷高麗國 西與魏虜接界（南齊）

東夷の高麗国は西で魏虜と接している。

高句麗者・・・其國 漢之玄菟郡也 在遼東之東 去遼東千里 漢魏世 南與朝鮮 濊貊 東與沃沮 北與夫餘接（梁）

・・・その国は漢の玄菟郡で、遼東の東千里の所にある。漢と魏の時代には南は朝鮮・濊貊と接し、東は沃沮と北は夫餘と接していた。

高句麗者 出於夫餘 自言先祖朱蒙・・・遼東南一千餘里 東至柵城 南至小海 北至舊夫餘（魏）

高句麗の夫餘の出で、先祖は朱蒙と言っている。・・・遼東の南千里余りで、東は柵城に至り、南は小海に至り、北は夫餘の旧領に至る。

高麗者 其先出於夫餘・・・其地 東至新羅 西渡遼水二千里 南接百濟 北鄰靺鞨千餘里 治平壤城（周）

高句麗の夫餘の出で、先祖は朱蒙と言っている。・・・その地の東は新羅で、西は遼水を渡り2千里で、南は百濟と接する。北隣は千余里で靺鞨である。平壤城で治めている。

高麗之先 出自夫餘・・・其國東西二千里 南北千餘里 都於平壤城・・・

復有國內城 漢城（隋）

高麗の先祖は夫餘である。・・・その国は東西 2 千里で南北は千里余りである。都は平壤城である。・・・また、国内城と漢城がある。

高句麗 在遼東之東千里 其先所出 事詳北史・・・其王都於丸都山下（南）

高句麗は遼東の南千里に在る。その先祖などは北史に書かれている。・・・王都は丸都山の麓にある。

高句麗 其先出夫餘・・・其國 東至新羅 西度遼 二千里 接百濟 鄰靺鞨・・・都平壤城・・・其外復有國內城及漢城 亦別都也 其國中呼爲三京 復有遼東 玄菟等數十城（北）

高句麗は夫餘の出で、先祖は朱蒙と言っている。・・・その国は東は新羅で、西は遼水を渡り 2 千里で、百濟と接し、隣は靺鞨である。都は平壤上である。・・・他に国内城と漢城を別都としている。国中で三京と呼んでいる。また、遼東を領有し、玄菟など数十城を有する。

高麗者 出自扶餘之別種也 其國都於平壤城 即漢樂浪郡之故地 在京師東五千一百里 東渡海至於新羅 西北渡遼水至於營州 南渡海至於百濟 北至靺鞨（旧唐）

高麗は扶餘から分かれたものである。都は平壤城で樂浪郡の在った所で京師から東へ 5100 里の所である。東へ海を渡ると新羅で西北へ遼水を渡ると營州

で、南へ海を渡ると百済に至る。北は靺鞨至る。

新唐書は旧唐書とほぼ同じである。

どの所も高句麗の出自は夫余としている。国名は周・隋・唐各書と北書は高麗、これら以外は高句麗を用いている。

百済・新羅は平壤遷都後のことである。高句麗の南は、三国志では朝鮮(楽浪郡)、魏書では小海、北史では百済となっている。東は、梁書と南史では濊貊が周書では新羅となっている。

唐書では、海路で書かれている。新羅に行くには、東の港へ行きそこから船で(南へ)行くことになる。海路が安全ならば、陸路で山道に行くより、近くまで船で行った方が、便利で楽である。時代は異なるが、女王国への行程でも、初めは船で韓に行くことになっている。唐の時代には日本海の沿岸航海が安全に行えるようになったということであろう。

風俗 などについて、目にとまった簡単な記事を挙げていく。

言語諸事 多與夫餘同 其性氣 衣服有異 (梁)

ことばや物事の多くは扶余と同じであるが、気質や衣服は異なる。

其人性兇急 有氣力 習戰鬥 好寇鈔 沃沮 東濊皆屬焉 (後漢)

気性と衣服は異なるところがある。兇急な性質で氣力がある。戦いに慣れ侵略を好む。沃沮や東濊はみな服属している。

其所居必依山谷 皆以茅草葺舍 唯佛寺 神廟及王宮 官府乃用瓦 (唐)

そこは山谷の中にあった。家は草ぶきであった。寺や神廟、王宮や官庁は瓦を用いている。

衣服が異なるのは高句麗が中国化したのではないか。

高句麗への公式な伝は 372 年である。

其馬皆小 便登山 國人有氣力 習戰鬥 沃沮 東濊皆屬焉 (三)

その馬はみな小さく、山では便利である。国人は氣力があり戦闘に習熟している。沃沮・東濊はこれに従う。

高句麗は建国以来 700 年近くたえまなく中国王朝の征討や遼東郡・玄菟郡との抗争を繰り返してきた。最終的には唐に負けたが、隋の煬

帝の親征には耐え抜いた。これが出来たのは、高句麗は山脈地帯にあり、攻略しにくいことと、鉱物資源が中国の支配を拒み、長続きした要因と考えていた。其馬皆小 便登山 はこの考えの補強になる。

馬に関しては、都井岬の馬を連想させる。移住者によってもたらされたのかもしれない。あるいは、ラバ(騾馬)やロバ(驢馬)も考えられるのではないか。

ピンイン 騾: luó、羅: luo、驢: lú、麗: lì、句: jù

朝貢と抗争および**王統**を見ていく。

建武八年 32 高句麗遣使朝貢 光武復 其王號

高句麗が使いを送り朝貢した。光武帝はその王号を再び与えた。

建武二十五年 49 句驪寇右北平 漁陽 上穀 太原 (後漢)

句驪は右北平・漁陽・上穀・太原を侵寇した。遼東太守の祭彤は . . .

后句驪王宮 和帝元興元年 105 復入遼東 (後漢)

后句驪王の宮は . . . 遼東にまた入った。

安帝永初五年 111 宮遣使貢獻 求屬玄菟 (後漢)

宮は使いを送り貢獻し、玄菟郡に帰属することを求めた。

王莽により下句麗侯とされていた。

太原を山西省の太原では少し遠い気がする。

高句麗本記からは、永初五年 111 の王は第 6 代太祖大王宮 53-146 で、建武二十五年 49 の高句麗王は宮の前王の、第 5 代慕本王 解憂 48-53 である。

ぴんいん 后: hòu、高: gāo

元初五年 118 復與濊貊寇玄菟 攻華麗城（後漢）

濊貊とともにまたを玄菟郡を侵寇し、華麗城を攻めた。

建光元年 121 春 幽州刺史馮煥 玄菟太守姚光 遼東太守蔡諷等 將兵 齟塞擊之（後漢）

幽州刺史の馮煥と玄菟郡の太守の姚光と遼東郡の太守の蔡諷らはこれを撃った。

夏 復與遼東鮮卑八韃餘人攻遼隊（後漢）

遼東鮮卑 8000 人余りと遼隊を攻めた。

秋 宮遂率馬韓 濊貊數韃騎圍玄菟（後漢）

宮は馬韓を率いて濊貊数千騎とで玄菟郡を囲んだ。

是歲宮死 子遂成立（後漢） 宮が死に、子の遂成が立った。

遂成死 子伯固立（後漢） 遂成が死に、子の伯固が立った。

桓之間 147-167 復犯遼東西安平（後漢）

また遼東郡の西安平を侵した。

建寧二年 169 玄菟太守耿臨討之（後漢）

玄菟郡の太守の耿臨はこれを討った。

**本有五族 有涓奴部 絶奴部 順奴部 灌奴部 桂婁部 本涓奴部爲王
稍微弱 今桂婁部代之（三）**

本は涓奴部・絶奴部・順奴部・灌奴部・桂婁部の五族があった。本は涓奴部から王を立てたが、今は桂婁部から王を立てている。

王の出身部が涓奴部から桂婁部に替わったと書かれている。後漢書と三国志の時代にはこの変更が書かれていないので、後漢の成立前のことと考える。新との抗争の過程で宮までに変わったとしておく。高句麗本記では、宮は第2代琉璃王子古鄒加再思之子となっている。なお、高句麗本記ではこれに対応する記事は見つけていない。

桂婁部以外は○奴部となっているのは気にかかる。

伯固死 有二子 長子拔奇 小子伊夷模 拔奇不肖 國人便共立伊夷模

爲王（三）

伯固が死んだ。子供は2人いた。長子は拔奇といい、小子は伊夷模といった。

拔奇は王としたふさわしくなく、国人は伊夷模を王として共立した。

建安中 196-220 公孫康出軍撃之（三）

公孫康は軍を出し、これを撃った。

伊夷模無子 淫灌奴部 生子名位宮 伊夷模死 立以爲王（三）

伊夷模は子がなかった。淫灌奴部の位宮を王とした。

これで高句麗王は

宮 → (子) 遂成 → (子) 伯固 → (子) 伊夷模 → 位宮

(涓奴部 →) 桂婁部 → 淫灌奴部

と変わったことになる。高句麗王は五部族の中から選ばれていた。交替は後継がないか、後継としてふさわしくない場合に行われたようだ。

景初二年 238 太尉司馬王率衆討公孫淵 宮遣主簿大加 將數千人助軍

(三)

太尉の司馬王は衆を率いて、公孫淵を討った。宮は主簿大加と将兵 1000 人を派遣し、助けた。

正始三年 242 宮寇西安平（三） 宮は西安平を侵寇した。

其五年 244 爲幽州刺史母丘儉所破（三）

幽州刺史の母丘儉の破る所となった。

高句驪王高璉 晉安帝義熙九年 遣長史高翼奉表 獻赭白馬 以璉為使
持節 都督營州諸軍事 征東將軍 高句驪 樂浪公（宋）

高句驪王の高璉は(東)晋の安帝の413義熙九年に長史の高翼を遣わして奉表し、白馬を献じた。璉を使持節都督營州諸軍事征東將軍高句驪樂浪公に叙した。

晋書安帝紀で

義熙九年 是歲 高句麗 倭國及西南夷銅頭大師並獻方物

高句麗と倭国および西南夷の銅頭大師が朝貢した。

を見つけた。朝貢があるのに高句麗条がないのは何故か。何らかの理由で高句麗を無視しているとしか思えない。

璉は 20 代の長寿王で、在位は 416 年から 491 年。413 年の王は広開土王であるが、三国史記には対応する記事を見つけていない。

Wiki「英州」では

後漢末の遼東で軍閥の公孫氏が割拠すると、渤海を渡って山東半

島の一部をも版図に収め、ここに営州刺史をおいた。南北朝時代に、北魏が北燕を滅ぼすと、444年(太平真君5年)、北燕遺領に営州を設置、州治を竜城とした。

Wiki「北燕」では

北燕は中国の五胡十六国時代の王朝のひとつ(407年 - 436年)。鮮卑化した漢人将軍馮跋が、後燕王の慕容熙を廃して建国した。首都は黄龍府すなわち龍城(遼寧省朝陽市)。主に遼西地方を領有した。

宋末 高麗王樂浪公高璉爲使持節 散騎常侍 都督營平二州諸軍事 車騎大將軍 開府儀同三司 (南齊)

宋の末に、高麗王樂浪公の高璉を 使持節散騎常侍都督營平二州諸軍事車騎大將軍開府儀同三司に除した。

Wiki「幽州」では

400年(咸寧2年)には後涼により幽州東部に平州を設置されている。

とある。晋書の地理には平洲があり遼東郡以東を幽州から分離した

ようだ。

高璉年百餘歳卒隆昌元年 494 以高麗王樂浪公高雲爲使持節 散騎常侍 都督營平二州諸軍事 征東大將軍 高麗王 樂浪公（南齊）

高璉は 100 歳を超えて卒した。高麗王樂浪公高雲を使持節 散騎常侍 都督營平二州諸軍事 征東大將軍 高麗王 樂浪公に叙した。

ここで、高雲は第 21 代文咨明王である。

6.3. 高句麗の王統

高句麗の王の一覧を表にする。

表 III01 高句麗の王統 I

1	朱蒙	鄒牟, 衆解	東明聖王		BC37-BC19	
2	類利	孺留	瑠璃明王		BC19-18	朱蒙元子
3	無恤		大武神王	大解朱留王	18-44	琉璃王第三子
4	解色朱		閔中王		44-48	大武神王之弟
5	解憂	解愛婁	慕本王		48-53	大武神王元子
6	宮	小名 於漱	太祖大王	國祖王	53-146	琉璃王子古鄒加再思之子
7	遂成		次大王		146-165	太祖大王同母弟
8	伯固		新大王		165-179	太祖大王之季弟
9	男武	伊夷摸	故國川王	國襄王	179-197	新大王伯固之第二子
10	延優	位宮	山上王		197-227	故國川王之弟也
11	憂位居	少名 郊	東川王	東襄王	227-248	山上王之子
12	然弗		中川王	中壤王	248-270	東川王之子
13	葉盧	若友	西川王	西壤王	270-292	中川王第二子
14	相夫	歆矢婁	烽上王	雉葛王	292-300	西川王之太子
15	乙弗	憂弗	美川王	好壤王	300-331	西川王之子古鄒加咄固之子
16	斯由	釗	故國原王	國上王	331-371	美川王太子
17	丘夫		小獸林王	小解朱留王	371-384	故國原王之子
18	伊連	於只支	故國壤王		384-391	小獸林王之弟
19	談德		廣開土王		391-413	故國壤王之子
20	巨連	璉	長壽王		413-491	広開土王之元子
21	羅雲		文咨明王	明治好王	491-519	長壽王之孫
22	興安		安臧王		519-531	文咨明王之長子
23	寶延		安原王		531-545	安臧王之弟
24	平成		陽原王	陽崗上好王	545-559	安原王長子
25	陽成		平原王	平崗上好王	559-590	陽原王長子
26	元	大元	嬰陽王	平陽王	590-618	平原王長子
27	建武	成	榮留王		618-642	嬰陽王異母弟
28	臧	寶臧	寶臧王		642-668	建武王弟大陽王之子

表 IIII01 で王の在位期間は Wiki から得た。その他のデータは三国史記高句麗本記から抜き出した。三国史記では諡号・諱の順に書かれているが、正史では諱が書かれているため、逆にした。なお、「weblio」から、季弟は一番下の弟、末弟である。また、元子は皇太子、太子である。

前節で、高句麗の王統に関して次を得た。

宮→(子)遂成→(子)伯固→(子)伊夷模→位宮

(涓奴部 →) 桂婁部 → 淫灌奴部

三国志では、位宮は淫灌奴部の生まれとなっている。伊夷模の前の何人かは桂婁部の王となる。後漢書で王は本涓奴部と書かれていることと、宮に関する記事には部出身部の記事がないことから、涓奴部から桂婁部への交替は、宮の即位前で、後漢以前か後漢のごく初期と考える。

一方、表 IIII01 では、

宮→(同母弟)遂成→(季弟)伯固→(子)伊夷模→(弟)位宮

となっている。宮の在位年数が94年であることから、同母弟・季弟

と継がれることについては疑問が残る。

上記5人の王で、正史の記年記事に現れるものの最初のものは、後漢書の 后句驪王宮 和帝元興元年 105 復入遼東 である。さらに、宮は建光元年 121 に崩御したことになるが、表 IIII01 では、在位期間は 53 年から 146 年となっている。

とにかく、在位期間まで考慮すると疑問が生じるが、宮から位宮までは王名と順番については正史と高句麗本記とは一致している。

表 IIII01 で宮以前の王を見ていくと

朱蒙→(元子) 類利→(第三子) 無恤→(弟) 解色朱→(無恤元子) 解憂
→(類利孫)宮

となる。

桂婁部から涓灌奴部の交替を、異なる部族の出身者の位宮を伊夷模の弟として組み込んだように、宮を過去の王に関連付けて組み込んだのではないかと、宮の時に涓奴部から桂婁部への交替が行われたのではないかと考える。これを作業仮説としておく。

作業仮説 IIII01、高句麗では、宮の時に涓奴部から桂婁部への交替が行われ、位宮のときに桂婁部から淫灌奴部への交替が行なわれた。

王朝の交替を処理するのに、前王の弟とするのと先の王の孫とする手法を推測した。日本書紀を見ていくとき、このことは参考になると考えている。ただし、三国史記は金富軾により、1143年に執筆開始され、1145年に完成した。日本書紀の完成より400年程後になる。

元興元年の記事の前に

王莽初 9 發句驪兵以伐匈奴 其人不欲行 強迫遣之 皆亡齧塞為寇盜
遼西大尹田譚追擊 戰死 莽令其將嚴尤擊之 誘句驪侯騶入塞 斬之
傳首長安 莽大說 更名高句驪王為下句驪侯 于是貊人寇邊愈甚
建武八年 32 高句驪遣使朝貢 光武復其王號 (後漢)

王莽初年9に、句驪に匈奴を伐つことを命じた。句驪の人は行くことを望まなかった。これを強く迫ると、みなは塞をほうきし、窃盗を行った。遼西郡の大尹の田譚は追撃したが、戦死した。王莽は将にこれを撃つことを厳命した。句驪侯を塞に誘い込み、これを斬り、首を長安に送った。莽は大いに喜び、高句驪王を下句驪侯とした。これより貊人が辺境をたびたび侵すようになった。

高句麗が使いを派遣し朝貢した。光武帝はその王号を戻した。

という記事があるが、高句麗の王名は書かれていない。宮の即位前に王莽による討伐が行われ、高句麗王は斬殺された。ここで王朝の交替が行われたことは十分考えられる。

位宮以後を見ていく。単独の王朝の正史の高句麗条で高句麗王の系譜をある程度記しているものは北朝の魏書と南朝の梁書である。なお、北史は通史であり、当然一番長い。

Wiki「北魏」では

北魏 386-534 は、中国の南北朝時代に鮮卑族の拓跋氏によって建てられた国。前秦崩壊後に独立し華北を統一して、五胡十六国時代を終焉させた。広義には東魏 534-550 と西魏 535-556 もこれに含まれる。

Wiki「梁（南朝）」では

梁 502-555 は、中国の南北朝時代に江南に存在した王朝。

武帝の天監年間には、九品官人法の改定、梁律の頒布、租税の軽減などの政策によって治世は安定し、南朝の全盛期を生み出した。また、

旧来の貴族の子弟が入る国子学以外に、寒門の子弟を対象とした教育施設として新たに五館を設置するなど学問を奨励したことによって、文化は大いに繁栄した。

と書かれており、32 年間は両王朝が並立したことになる。比較的安定した時期ではなかったかと思っている。

表 IIII01 で 386 年の高句麗王は 18 代故国壤王伊連で、534 年は 23 代安原王寶延、555 年は 24 代陽原王平成となっている。

魏書に書かれている系統を系図風に図示にしてみると

朱蒙 1 → 閻達 → (子) 如栗 → (子) 莫來 — → (子孫相傳 裔孫) 宮 6
→ (曾孫) 位宮 10 → (玄孫) 乙弗利 15 → (利子) 釗 16
→ (曾孫) 璉 20 → (孫) 雲 21 → (世子) 安 22 → (子) 延 23
→ (子) 成 24

となる。裔孫は遠い子孫。ウィクショナリ「孫」では

子 → 孫 → 曾孫 → 玄孫 → 来孫 → 昆孫 → 仍孫 → 雲孫

とされている。

梁書では

宮 6→(子) 伯固 8→(子) 伊夷摸 9→(子) 位宮 10→ . . .
→乙弗利 15→(子) 釗 16→垂 17→(子) 寶 18→安 19
→(孫) 璉 20→(子) 雲 21→(子) 安 22→(子) 延 23

北史では

朱蒙 1→(子) 如栗→(子) 莫來→(裔孫) 宮 6→(子) 伯固 8
→(子) 伊夷摸 9→(子) 位宮 10→(玄孫) 乙弗利 15→(子) 釗 16
→垂 17→寶 18→安 19→(釗曾孫) 璉 20→(孫) 雲 21
→(世子) 安 22→(子) 延 23→(子) 成→(子) 湯

これに新唐書の 元 26→(弟)建武 27→藏 28 を加え、次を得る

表 IIII02 高句麗の王統 II

朱蒙 1→閔達→(子) 如栗→(子) 莫來—→(子孫相傳 裔孫) 宮 6
→(子) 伯固 8→(子) 伊夷摸 9→(曾孫) 位宮 10→(玄孫) 乙弗利 15
→(利子) 釗 16→垂 17→(子) 寶 18→安 19→(釗曾孫) 璉 20
→(孫) 雲 21→(世子) 安 22→(子) 延 23→(子) 成 24→(子) 湯
→元 26→(弟)建武 27→藏 28

表 III01 と表 III02 では、朱蒙と宮の間は全く異なる。これは、正史では朝貢していた王の名を記録したが、かれらは宮とは別の系列で、宮の時に涓奴部から桂婁部への交替が行われたことへの傍証となるのではないか。

位宮 10 と乙弗利 15 の間がぬけている。表 III01 から、11 代東川王の在位期間は 227 年から 248 年、第 14 烽上王の在位期間は 300 年から 331 年である。一方、西晋は 265 年から 316 年で、晋書で高句麗を無視し、王の記録も残っていなかったと考える。

次の作業仮説を設定する。

作業仮説 III02 高句麗の王統では、第 6 代太祖大王 宮 以降の王は正史の王と一致する。

表 III02 において、11 代憂位居から 14 代相夫が抜けている。位宮 10 から相夫 14 までの諡号と在位期間を抜き出す。

10 代山上王	延優（位宮）	197-227
11 代東川王	憂位居	227-248
12 代中川王	然弗	248-27

13代西川王 薬廬（若友） 270-292

14代烽上王 相夫（歃矢婁） 292-300

この辺りの高句麗の状況について、Wiki「高句麗」丸都城遷都と周辺諸国との戦いを引用しておく。

2世紀末、後漢が分裂状態に陥ると、遼東地方では公孫度によって公孫氏政権が打ち立てられた。一方の高句麗では高句麗王伯固の死後、その息子延優（山上王 197-227）が即位したが、これに反発した兄の発岐は公孫氏を頼って延優に対抗し、遼東へ移り住んだ。延優は公孫氏と発岐から逃れて南に移動し、古くからの重要拠点である国内城（集安）で新国を建てた。この新国がその後の高句麗の歴史を担うことになり、国内城は高句麗の王都となった。国内城は旧高句麗県の県城を居城として転用したもので、背後の山には緊急用の大規模な山城（丸都城、山城子山城）が築かれた。山城の丸都城と平城の国内城とは一体となって王都を構成した。

高句麗は漢の滅亡の後に魏と結び、司馬懿率いる魏軍が公孫氏を討伐する際には援兵も出したが、242年には延優の跡を継いだ憂位居（東川王）が西安平を寇掠し魏と衝突するようになった。魏は將軍毋

丘儉の指揮の下で数度に渡り高句麗への遠征を行った。東川王は20,000の兵を率いて迎え撃ったが敗退し、丸都城を落とされた。毋丘儉は将兵に墳墓破壊を禁じ捕虜と首都を返還したが高句麗は服属せず、魏は245年に再び侵攻した。高句麗は南北の2方向から侵攻した魏軍との激しい戦いの末に敗れた。東川王は沃沮・不耐の故地にまで逃がれて魏軍の追撃から身を隠した。

この間、中国では魏から晋への交替が行われた。

高句麗はこの戦争の敗北から立ち直り、美川王(乙弗)が即位したころには、従来からの五部体制を維持しつつも国王権力の集中が推し進められ官位制度が整備されるなど内政面の強化が行われた。311年には丹東を攻略して朝鮮半島の郡県を中国本国から切り離し、盛んに楽浪郡や帯方郡を攻撃した。313年には楽浪郡を占領し朝鮮半島北部の支配を確立した。高句麗は平壤を新たな拠点として確保する一方で、楽浪郡に残った漢人に対しては緩やかな支配で臨んだ。更に北方では夫余を攻撃してその本拠地を支配下に置いた。

同時期に勢力を大幅に強めていた鮮卑の慕容氏が高句麗と直接対峙するようになった。高句麗は撫順に移転していた玄菟郡を倒し、その地に新城(高爾山城)を築いて西方の拠点とした。しかし、慕容氏の慕容皝は342年に大軍をもって高句麗に侵攻した。高句麗はこの

戦いに敗れ丸都城が再び失陥した。高句麗王釗（故国原王）は翌年、前燕に臣下の礼を取り王弟を入朝させることによって難局を乗り切った。350年代には前燕に人質を入れて戦争中に捕らわれていた王母を取りもどし、征東大將軍・營州刺史・楽浪公として冊封された。この頃、朝鮮半島中央部で新たに馬韓諸国が統合して形成されていた百済の近肖古王によって旧帯方地域が奪われた。故国原王は369年と371年に百済を攻撃したが、これに敗れ、逆に平壤を攻撃した百済軍との戦いで流れ矢にあたり戦死した。

国王戦死によって高句麗は混乱し、跡を継いだ小獸林王は前燕を滅ぼした前秦との関係強化に努めた。372年に秦王苻堅から僧順道や仏典・仏像が贈られ、375年には寺院が建立された。これが高句麗への仏教公伝である。

この引用文における戦闘は、正史で確認していない。

次の高句麗王は碑文で有名な広開土王(好太王)391-412で、その次の長寿王413-491は427年に平壤へ遷都した。

7. 百済の王統

百済に関しては、倭に関連して、断片的に触れてきた。正史に百済が現れるのは、晋書の東晋簡文帝紀の次の記事である。

簡文帝咸安二年 372 正月 百済 林邑王各遣使貢方物

六月 遣使拜百済王餘句爲鎮東將軍 領樂浪太守

正月 百済と林邑の王は夫々朝貢した。

六月 使いを送り、百済王の餘句を鎮東將軍領樂浪太守に叙した。

咸安は東晋の簡文帝の元号で、簡文帝の在位は 371 年から 372 年までで咸安も同じ期間である。東晋は山東半島から南の王朝である。また、372 年は百済が故国原王の高句麗を破った翌年である。

書かれているのは、東夷伝ではなく、本紀である。一方、晋書東夷伝では帯方郡の南には、馬韓・辰韓・弁韓の三韓が書かれている。百済が東夷伝に書かれていないことは、疑問 I07 としておいた。

朝貢の使者に対し、その国が何処にあるかは先ず確かめることである。韓条に書かれていないということから、少なくとも、咸安二年の使者からは、百済が韓の地にあるとは聞き取ることが出来なかつ

たということになる。

ここで、馬韓の地、または、その近くに移る前の百済を前百済と呼ぶことにする。では、前百済何処にあったのだろうか。

百済本紀に次の記事がある。

**温祚王十三年 BC5 遣使馬韓 告遷都 遂畫定疆場 北至河 南限熊川
西窮大海 東極走壤**

使いを馬韓に派遣し、遷都を告げた。国を北は河まで、南は熊川、西は大海で東は範囲の及ぶところと定めた。

十四年 遷都 遷都した。

温祚王とその十三年の BC5 年という時期は早すぎると思われる。年代を考慮しないことにすれば、ある時に馬韓かその周辺の地を領有し、馬韓にこのような通告をした、すなわち、馬韓の地を征服(攻略)したことは考えられる。また、通告して1年で遷都したことになる。何処に遷都したかは書かれていない。三国史記や後の歴史からも、新都は漢城(京城)でほぼ間違いないと考えている。また、Wiki「熊川」は錦江の別名と書かれ、沿岸には光州や扶余がある。

ここで、疑問を設定する。

疑問 IIII02. 前百済は何処にいたか。何時馬韓の地に建国したか。

百済本紀では

近肖古王二十七年 372 遣使入晉朝貢 晋に使いを送り朝貢した。

があり、咸安二年 372 の記事と記年と合っている。

前章で引用した Wiki の文では、372 年の前年 371 年は、百済が攻撃してきた高句麗軍に反撃し、平壤を滅ぼした。このとき、故国原王は戦死した。ここでは、馬韓諸国が統合して形成されていた百済という記述があるが、どのように統合されたのかはわからない。

近仇首王五年 379 遣使朝晉 其使海上遇惡風 不達而還

晋に使いを送り朝貢したが、その使いは海で暴風に会い還らなかった。

この記事からは、百済から山東半島へ直接渡航したことが考えられる。京城から山東半島までは真西に進めばよく、朝鮮西端の黄海南道の甕津半島・龍淵半島辺りはほぼ中間である。

7.1. 高麗略有遼東 百濟略有遼西

晋書の次の宋書では百濟国条に書かれ、次の文で始まる。

百濟國 本與高麗俱在遼東之東千餘里 其後高麗略有遼東 百濟略有遼西 百濟所治 謂之晉平郡晉平縣

百濟国は本は高麗とともに遼東の東千里程の所にいた。その後、高麗が遼東を略有したとき、百濟は遼西を略有した。百濟が支配したところはいわゆる晉平郡晉平縣である。

遼東之東千餘里 は後漢書・三国志では高句麗の位置であり、馬韓の地とは考えられない。したがって、本は馬韓の地には居なかったことになる。宋書では、東夷高句麗國 今治漢之遼東郡 とされている。宋書では上の記事に続き、さらに後漢書・三国志に書かれていないのは、高句麗に支配下にあったか、濊貊の一種ではなかったかと考える。

義熙十二年 416 以百濟王餘映為使持節 都督百濟諸軍事 鎮東將軍

百濟王の餘映を使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍とする。

高祖踐阼 進號鎮東大將軍

高祖が即位した時、鎮東大將軍に進めた。

が書かれている。義熙は東晋の安帝の最後の元号で405年から418年である。高祖武帝劉裕が即位したのは420年である。

梁書の記事は

其國本與句驪在遼東之東 晉世句驪既略有遼東 百濟亦據有遼西 晉平二郡地矣 自置百濟郡

百濟は句驪とともに遼東郡の東にあった。晋の時代に句驪が遼東を制した時、百濟もまた遼西郡と晋平郡を據有し、百濟郡を置いた。

で、宋書とほぼ同じであるが、略有遼東は晋の時代と書かれている。

義熙十二年416の記事には、百濟本記の

腆支王十二年 416 東晋安帝遣使 冊命王爲使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍百濟王

東晋の安帝に使を派遣した。使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍百濟王に冊封された。

が対応している。東晋安帝遣使 は中国語としては、安帝が遣使した、

とするのであろうが、朝鮮語の語順は日本語と同じということから、安帝に遣使した、と解釈した。

前々節で引用した Wiki 「高句麗」の記事の一部を再掲する。

美川王(乙弗)300 永嘉-331 は、311 年には丹東を攻略して朝鮮半島の郡県を中国本国から切り離し、盛んに楽浪郡や帯方郡を攻撃した。

313 年には楽浪郡を占領し朝鮮半島北部の支配を確立した。

馬韓諸国が統合して形成されていた百済の近肖古王によって旧帯方地域が奪われた。故国原王は 369 年と 371 年に百済を攻撃したが、これに敗れ、逆に平壤を攻撃した百済軍との戦いで流れ矢にあたり戦死した。

この 311 年を略有遼東の候補と考える。313 年は懐帝 307-311 永嘉五年になる。

晋書には高句麗条がなく、他の書で対応する記事は見つけていない。懐帝紀(永嘉年間)は始めから各地の反乱の記事が殆どで、永嘉二年からは石勒 274-333 との抗争が始まり、これが続くことになる。この結果、晋は遼東を支配できなくなったと考える。

したがって、この間の状況は高句麗本記にあたることになる。

311年の高句麗の王は15代美川王乙弗300-311である。

高句麗本記の遼東郡の攻防と百済の記事を見ていく。

美川王三年 302 王率兵三萬 侵玄菟郡 虜獲八千人 移之平壤

王は3万の兵を率いて、玄菟郡を侵し、8000人の捕虜を平壤に移した。

十二年 311 遣將襲取遼東西安平 遼東郡の西安平を襲い奪取した。

十四年 313 侵樂浪郡 虜獲男女二千餘口

樂浪郡を侵し、2000人余りの男女を虜獲した。

十五年 314 南侵帶方郡 南進し、帶方郡を侵した。

十六年 315 攻破玄菟城 殺獲甚衆

玄菟城を攻め破り、多くの民衆を殺獲した。

二十一年 320 遣兵寇遼東 慕容仁拒戰破之

遼東郡に兵を派遣した。慕容仁が抗戦したがこれを破った。

故國原王四年 334 増築平壤城(訳) 平壤城を増築した。

九年 339 燕王來侵 兵及新城 王乞盟 乃還

燕王が侵攻し、新城に迫った。盟を乞い、兵は還った。

十二年 342 春二月 修葺丸城 又築國內城 秋八月 移居丸都城

葺丸城を修築し、国内城を築いた。8月に丸都城に移った。

三十九年 369 王以兵二萬 南伐百濟 戰於雉壤 敗績

(訳)王は2万の兵で百濟を攻め、雉壤で戦い、敗績した。

四十年 370 秦王猛 伐燕破之 燕太傅慕容評來奔 王執送於秦

秦王の猛は燕を伐ち破った。燕の太傅の慕容評が逃げてきたが、秦に送った。

四十一年 371 冬十月 百濟王率兵三萬 來攻平壤城 王出師拒之 爲流矢所中

百濟王は3面の兵で平壤城を攻めた。王は出陣したが流矢に当たり死んだ。

百濟略有遼西の可能性のあるのは、美川王十二年 311 と二十一年 320 である。311年の記事は 侵 ではなく、襲取 が用いられている。高句麗が樂浪郡と帶方郡を滅ぼした後、馬韓を攻略したと考えれば、311年の可能性が高いと考える。

高句麗本記の百濟の記事で、瑠璃明王二年 BC20 百濟始祖祚立 と大武神王二年 19 百濟民一千餘戸來投 の2つの記事を除けば、三十九年 369 の南伐百濟の記事が最初の百濟の記事である。

これらから、馬韓の地の百濟の成立は、高句麗が帶方郡を滅ぼした314年以後で、故國原王が南伐百濟 を行った369年の間と考える。

これ以前は前百濟であるが、前百濟が何と呼ばれていたかはわか

らない。以上を作業仮説としておこう。

作業仮説 IIII03. 百濟略有遼西は311年である。また、馬韓の地の百濟は、313年から369年の間に成立した。

殆ど答えが出ている疑問であるが、疑問 IIII02 を書き換えておく。

疑問 IIII02'. i) 晋書卷9・簡文帝紀 に記載されている372年に晋に朝貢した百濟は何処にあったか。

ii) 高驪が遼東を略有したのは何時か。また、このとき遼西を略有した百濟はどこにあったか。

iii) 前百濟と百濟との関係は。

i) については、馬韓の地にあった。

ii) については、311年で、1章で述べた蓋馬高原が有力と思っている。

iii) については手掛かりが無いが、この蓋馬高原に居た前百濟が遼西を略有し、追われた後、高句麗が樂浪・帶方2郡の攻略に乗じて馬韓に百濟を建国したのではないかと考えている。

Wiki 「 帯方郡 」 では

建興元年 313 遼東へ進出した高句麗が南下して楽浪郡を占領すると、朝鮮半島南半に孤立した帯方郡は晋の手を離れ情報も途絶した。元の帯方郡や楽浪郡南部に残された漢人の政権や都市は、東晋を奉じて 5 世紀初頭までの存続が確認されているが、5 世紀前半には百済によって征服され、5 世紀後半に入ると南下した高句麗が百済を駆逐して支配下へ置いた。

高句麗本記では 313 年は 侵楽浪郡で、314 年に 南侵帯方郡 と書かれている。侵 は郡衙とその周辺を滅ぼすとすれば周辺の県レベルの都市は存続したと考えることもできる。

Wiki 「百済」 国名では、

百済の国名の由来はわかっていない。三国史記・百済本紀に記載される神話では初代王である温祚王が夫余の地から遷って建国した際、10 人の家臣の助力を得たことから国号を十済とし、その後温祚王の兄の沸流に従っていた人々が温祚王の国に合流した際に、百姓が楽しみ従ったことから国号を百済と改めたという。朝鮮史研究者の井

上秀雄は、三国史記の訳注にて、これを事実とは認めがたいとしている。詳細は建国神話節を参照。また、隋書百濟伝は、移動の際に百家で海を済ったので、それに因んで百濟という国名となったと伝えている。

たくさんの家臣団をとともに移動し、百濟建国したという点は共通である。これを始祖の話とする点は日本書紀に通じる。

宋書の記事からは、馬韓の地に移る前から百濟を名乗ったことになる。

7.2. 正史による百済の王統

前節で引用した、晋書の記事と宋書の義熙十二年 416 の記事を再掲し、南北朝の正史の百済の朝貢記事を王統を主に見ていく。

簡文帝咸安二年 372 正月 百済 林邑王各遣使貢方物
六月 遣使拜百済王餘句爲鎮東將軍 領樂浪太守

孝武帝太元九年 384 百済遣使來貢方物

百済は使いを派遣し朝貢した。

百済王の名が書かれていないが。梁書にある晋太元中の王須になると考える。

十一年 386 以百済王世子餘暉爲使持節 都督 鎮東將軍 百済王

百済王の世子の餘暉を使持節都督鎮東將軍百済王とした。

梁書を加味した晋書の記事からは百済の王統は

句→須→暉

となる。次は宋書の記事である。

義熙十二年 416 以百濟王餘映為使持節 都督百濟諸軍事 鎮東將軍

百濟王の餘映を使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍とした。

高祖踐阼 417 進號鎮東大將軍 映を鎮東大將軍に進めた。

少帝景平二年 423 映遣長史張威詣闕貢獻

映は長史の張威を派遣し朝貢した。

元嘉七年 430 百濟王餘毗復修貢職 以映爵號授之

百濟王の餘毗はふたたび朝貢した。映の爵位を授けた。

二十七年 450 毗上書獻方物 毗は書を奉り、産品を獻じた。

毗死 子慶代立 毗が死に、子の慶が立った。

世祖大明元年 457 遣使求除授 詔許 叙位をもとめた。これを許した。

二年 458 慶遣使上表曰 上書朝貢した。

太宗泰始七年 471 又遣使貢獻 また朝貢した。

ここまでが宋書で、百濟王は

句→須→(子)暉→映→毗→(子)慶

と替わった。なお、餘映が417年に得た鎮東大將軍を、倭王武は479年に得た。將軍位に関しては、百濟王は鎮東將軍から始まるが、倭王は1つ下の安東將軍から始まる。502年には、百濟王太は征東將軍、

倭王武は征東大將軍となり、逆転した。

次は(南)齊書の記事である。

牟大又表曰・・・亡祖父牟都

建武二年 495 牟大遣使上表曰

の 2 つの記事がある。祖父から継ぐことは少ないがあり得ることではある。他書では父子としている。

王統に関しては、梁書が詳しい。なお、梁は 502 年から 577 年まで続いた。

晉太元中 王須 義熙中 王餘映 宋元嘉中 王餘毗 並遣獻生口 餘毗
死 立子慶 慶死 子牟都立 都死 立子牟太 齊永明中 除太都督百濟
諸軍事 鎮東大將軍 百濟王

晉の太元年間 376-396 に王須が、義熙年間 405-418 に王餘映が、宋の元嘉年間 424-453 に王餘毗が生口を献じた。餘毗が死んで子の慶が立った。慶が死んで子の牟都が立った。都が死んで子の牟太が立った。齊の永明年間 483-493 に

太を都督百濟諸軍事鎮東大將軍百濟王に除した。

梁の天監は 502 年から 519 年まで、普通は 520 年から 527 年までである。

天監元年 502 進 太號征東將軍 尋爲高句麗所破 衰弱者累年 遷居南韓地

天監元年 502 に太を征東將軍に進めた。高句麗に敗れてから年々勢いが衰え、南韓に移った。

普通二年 521 王餘隆始復遣使奉表 . . .

普通二年 521 に王餘隆は再び朝貢を始めた。 . . .

五年 524 隆死 詔復以其子明爲持節 督百濟諸軍事 綏東將軍 百濟王

隆が死に、その子明を持節督百濟諸軍事綏東將軍百濟王に復した。

梁書の王統に、晋書の王統を句を加えれば、百濟王統は

句→須→(子)暉→映→毗→(子)慶→(子)牟都→(子)牟太
→隆→(子)明

となる。

天監元年の記事の遷居南韓地 は公州であろう。これは 502 年以降である。500 年の高句麗王は文咨明王である。

この他に、梁書では

號所治城曰固麻 謂邑曰簷魯 如中國之言郡縣也

城を置き治める所を固麻といい、邑を簷魯という。中国の郡縣の様なものといえる。

ピンイン 固麻: gù má、簷魯: yán lǔ

其國近倭 頗有文身者 今言語服章略與高麗同

その国は倭に近く、刺青をする者もいる。言葉と服装は高麗と概ね同じである。

魏書百濟条では

百濟國 其先出自夫餘 其國北去高句麗千餘里 處小海之南・・・其衣服飲食與高句麗同

百濟國は夫餘の出である。其國は高句麗の北千餘里で、小海の南である。・・・その衣服と飲食は高句麗と同じである。

延興二年 472 其王餘慶始遣使上表曰

その王餘慶は初めて遣使し、上奏した。(以下長い上奏文)

小海は黄海と渤海湾の間(朝鮮湾と記した地図もある)。

周書百濟条は

百濟者 其先蓋馬韓之屬國 夫餘之別種 有仇台者 始國於帶方 故其
地界東極新羅 北接高句麗 西南俱限大海 東西四百五十里 南北九百
餘里 治固麻城 其外更有五方 中方曰古沙城 東方曰得安城 南方曰
久知下城 西方曰刀先城 北方曰熊津城

百濟の先祖は蓋馬韓に属し、夫餘の系統である。仇台が帶方で国を始めた。
東は新羅と北は高句麗と接し、西南は大海である。東西は 450 里で南北は 900
里である。固麻城で治めている。その他に五方を持つ。中方は古沙城、東方は
得安城、南方は久知下城、西方は刀先城、北方は熊津城という。

(北)周は 559 年から 581 年までである、

王姓夫餘氏 王の姓は夫餘氏である。

官有十六品 左平五人 一品 達率三十人二品 恩率三品 德率四品
扞率五品 柰率六品 . . .

官には 16 品がある。1 品は佐平で 5 人である。2 品は達卒で 30 人である。

以下、恩率 3 品 徳率 4 品 扞率 5 品 柰率 6 品と続く。

其王隆亦通使焉 隆死 子昌立 隆が死に、子の昌が立った。

建徳六年 577 齊滅 昌始遣使獻方物

齊が滅びた。昌は朝貢を始めた。

宣政元年 578 又遣使來獻 また朝貢した

王統は 隆→(子) 昌 である。

蓋馬韓之屬國は「おおむね馬韓の属国」とするか「蓋馬韓の属国」か、他に正統な解釈があるかわからない。馬韓のように蓋馬韓を用いたことが意味あるならば、2 番目の蓋馬を残すのが面白い。「蓋馬にあった国の 1 つ」と理解することである。

隋書百濟条では

百濟之先 出自高麗國 百濟は高麗國の出である。

其國東西四百五十里 南北九百余里 南接新羅 北拒高麗 其都曰居拔城

東西四百五十里 南北九百餘里で、南は新羅と接し、北には高麗がある。都は居拔城といわれている。

東明之後 有仇台者 篤於仁信 始立其國于帶方故地 漢遼東太守公孫

度以女妻之 漸以昌盛 爲東夷強國 初以百家濟海 因號百濟

東明の後、仇台は仁信に篤かった。帶方郡の在った地にその国を立てた。・・・

其人雜有新羅 高麗 倭等 亦有中國人 其衣服與高麗略同

人は新羅・高麗・倭などがまじっている。中国人もいる。衣服は高麗とほぼ同じである。

開皇初 581 其王餘昌遣使貢方物 拜昌爲上開府 帶方郡公 百濟王

その王餘昌は朝貢した。上開府帶方郡公百濟王とした。

昌死 子余宣立 死 子餘璋立

昌が死に、子の余宣が立たった。宣が死に、子の餘璋が立った。

**平陳之歲 588 有一戰船漂至海東舂牟羅國 其船得還 經於百濟 昌資
送之甚厚 並遣使奉表賀平**

戦船が1隻漂流し、海の東の舂牟羅国にたどりついた。船では還ることが出来ず百濟についた。昌は手厚くもてなし、送り届け、陳の平定を奉賀する使者を派遣した。

大業三年 607 璋遣使者燕文進朝貢

璋は燕文進を派遣し、朝貢した。

其年 又遣使者王孝鄰入獻 請討高麗 煬帝許之

この年、璋は王孝鄰を派遣し朝貢し、高麗を討つことを要請し、帝はこれを許した。

七年 611 帝親征高麗 帝は高麗に親征した。

明年 612 六軍渡遼 璋亦嚴兵於境 聲言 助軍 實持兩端 尋與新羅有隙 每相戰爭

六軍は遼河を渡った。(以下は訳せず。)

十年 614 復遣使朝貢 後天下亂 また朝貢した。その後国が乱れた。

王統は 昌→(子) 宣→(子) 璋 となっている。

以上をまとめると

表 III03 正史による百済の王統

句→須→暉→映→毗→慶→牟都→牟太→隆→昌→宣→璋 (周・隋)
→明 (梁)

となる。

7.3. 百済の王統

Wiki の王統に三国史記の記事を補足したものを示す。

表 III04 百済の王統

1 温祚王	BC18-28	父鄒牟 或云朱蒙	17 阿莘王	392-405	枕流王之元子	
2 多婁王	28-77	温祚王之元子	18 腆支王	405-420	阿莘王之元子	映・腆
3 己婁王	77-128	多婁王之元子	19 久爾辛王	420-427	腆支王長子	
4 蓋婁王	128-166	己婁王之子	20 毗有王	427-455	久爾辛王之長子	
5 肖古王	166-214	蓋婁王之子	21 蓋鹵王	455-475	毗有王之長子	慶・慶司
6 仇首王	214-234	肖古王之長子	22 文周王	475-477	蓋鹵王之子	
7 沙伴王	234-234	仇首王之長子	23 三斤王	477-479	文周王之長子	
8 古尔王	234-286	蓋婁王之第二子	24 東城王	479-501	文周王弟昆支之子	牟大・摩牟
9 責稽王	286-298	古尔王子	25 武寧王	502-523	東城王之第二子	斯摩・隆
10 汾西王	298-304	責稽王長子	26 聖王	523-554	武寧王之子	明濃
11 比流王	304-344	仇首王第二子	27 威徳王	554-598	聖王之元子	昌
12 契王	344-346	汾西王之長子	28 惠王	598-599	明王第二子	季
13 近肖古王	346-375	比流王第二子	29 法王	599-600	惠王之長子	宣
14 近仇首王	375-384	近肖古王之子	30 武王	600-641	法王之子	璋
15 枕流王	384-385	近仇首王之元子	31 義慈王	641-660	武王之元子	義慈
16 辰斯王	385-392	近仇首王之仲子	(豊璋王)	661-668		

ここで、王名と前王との関係は百済本紀のものを用いた。

沙伴王に関しては、百済本紀には記事がなく、次の古尔王本紀に、

仇首王在位二十一年薨 長子沙伴嗣位而幼少不能爲政 肖古王母弟古尔即位

仇首王の長子の沙伴王が即位したが、幼少で政治を行うことができず、肖古王母弟の古尔王が王位についた。

と記されている。

前に晋書の記事

咸安二 372 年 遣使拜百濟王餘句爲鎮東將軍

と百濟本記の記事

近肖古王二十七 372 年 遣使入晉朝貢

との記年が一致していることをみた。これより次の作業仮説をおく。

作業仮説 IIII04 百濟の近肖古王二十七年は 372 年である。この時の王は餘句と名乗った。

この作業仮説は近肖古王二十七年としている年が 372 年だけで、餘句が近肖古王であるかどうかはまだ問題としておく。

近肖古王以後の百濟王に関する正史の記年記事と表 IIII04 の各王の在位期間を見ていく。

咸安二 372 年 遣使拜百濟王餘句爲鎮東將軍 (晋)

餘句は百濟本記でも句としていることから、近肖古王 346-375 と
してよいだろう。

孝武帝太元九年 384 百濟遣使來貢方物 (晋)

この時の王は近仇首王(須)375-384 とする。

周書と隨書に書かれた 有仇台者 始國於帶方 の仇台に対応する
王が見つからない。仇を含む王は(近)仇首王である。仇首王とすれば
在位期間は帶方郡の滅びる前となる。近仇首王とすれば、平壤を攻め
た後帶方郡衙を都とすれば、一応辻褄が合う。

十一年 386 以百濟王世子餘暉爲使持節都督鎮東將軍百濟王 (晋)

表 IIII04 では、近仇首王(須)と腆支王(映)の間には枕流王 384-385・
辰斯王 385-392・阿莘王 392-405 の 3 人の王がいるが、暉に対応する
王は特定できていない。

義熙十二年 416 以百濟王餘映爲使持節 都督百濟諸軍事 鎮東將軍
(宋)

腆支王十二年 416 東晉安帝遣使 冊命王爲使持節都督百濟諸軍事鎮

東將軍百濟王

高祖踐阼 417 進號鎮東大將軍 (宋)

義熙は東晋安帝の最後の元号で 405 年から 418 年である。

餘映は腆支王(映・腆)405-420 とする。次の記事は在位期間から外れる。

少帝景平二年 423 映遣長史張威詣闕貢獻 (宋)

元嘉七年 430 百濟王餘毗復修貢職 (宋)

二十七年 450 毗上書獻方物 (宋)

餘毗は毗有王(毗) 427-455 としてよいであろう。表 IIII04 では、腆支王と毗有王(慶)の間に久爾辛王 420-427 がいる。

毗死子慶代立 (宋)

世祖大明元年 457 遣使求除授 詔許 (宋)

二年 458 慶遣使上表曰 (宋)

太宗泰始七年 471 又遣使貢獻 (宋)

延興二年 472 其王餘慶始遣使上表曰 ((北)魏)

餘慶は蓋鹵王(慶・慶司) 455-475 とする。

建武二年 495 牟大遣使上表曰 ((南)齊)

天監元年 502 進 太號征東將軍 尋爲高句驪所破 衰弱者累年 遷居南
韓地 (梁)

牟太と牟大は同じとして、東城王(牟大・摩牟) 479-501 とする。
表 IIII04 では、蓋鹵王(慶・慶司)と武寧王の間に、文周王 475-477、
三斤王 77-479、東城王(牟大・摩牟) 479-501 がいる。また、日本書
紀では 文斤王 がいたことになっている。一方、表 IIII03 にある牟都
が表 IIII04 にはいない。

普通二年 521 王餘隆始復遣使奉表 . . . (梁)

餘隆は武寧王(斯摩・隆) 502-523 とする。

普通五年 524 隆死 詔復以其子明爲持節 督百濟諸軍事 綏東將軍 百
濟王 (梁)

中大通六年 534 大同七年 641 累遣使獻方物(梁)

太清三年 549 不知京師寇賊 猶遣使貢獻(梁)

明を聖王(明濃)523-554 とする。

其王隆亦通使焉隆死 子昌立 (北周)

建德六年 577 齊滅 昌始遣使獻方物（北周）

宣政元年 578 又遣使來獻（北周）

開皇初 581 其王餘昌遣使貢方物 拜昌爲上開府 帶方郡公 百濟王
（隋）

昌を威德王(昌)554-598 とする。

隆の次が明と昌に分かれている。朝貢先は明が南朝の梁で昌は北周である。一方、表 IIII04 では 隆→明→昌→季→宣 は親子関係で繋がっている。昌は前王を隠し、隆の子として北周到朝貢したのと考え
る。

昌死子余宣立 死 子餘璋立（隋）

宣を法王(宣)599-600 とする。表 IIII04 では、法王の前に惠王
(季)598-599 がいる。

大業三年 607 璋遣使者燕文進朝貢（隋）

七年 611 帝親征高麗 璋使其臣國智牟(隋)

十年 614 復遣使朝貢(隋)

武德四年 621 其王扶餘璋遣使來獻果下馬（旧唐）

七年 624 又遣大臣奉表朝貢

十五年 632 璋卒 其子義慈遣使奉表告哀

璋を武王(璋)600-641 とする。

義慈は義慈王 641-660

26代 聖王(明濃)を 明 とし、隆と昌の間に入れれば、武寧王(隆)から最後の義慈王まで、在位期間の短い惠王を除いて、図表 IIII03 と表 IIII04 は一致する。

また、梁書の 隆→明 と周書の 隆→昌 と百濟本記の 隆→明→昌 を除けば、正史に名前のある王の在位期間と朝貢年はほぼ矛盾はない。

これらから近尚古王以降は史実として信じてよいと考える。これを作業仮説としておく。

作業仮説 IIII05 近尚古王以降の王統は史実である。

7.4. 修正系譜

ここでは、近尚古王以前の王について考える。

表 IIII04 を前王との父子関係あるかないかという観点から眺めてみると、幾つかの奇妙なことが目につく。

まずは、沙伴王の次の第 8 代古尔王が第 4 代蓋婁王の第二子となっているが、蓋婁王の没年は 166 年で古尔王の即位は 234 年であり、差は 68 年である。

次に、304 年即位の第 11 代比流王が第 6 代仇首王の第二子であるが、仇首王の没年は 234 年でここでも 70 年の差がある。

最後に、年代はそれ程おかしくないが、第 12 代契王と第 13 代近肖古王はそれぞれ先々代の王の子になっていることである。

王名に関しては、5 代肖古王・6 代仇首王と 13 代近肖古王・14 代近仇首王と同じ名前での後のものに近を付けている。10 世紀までの中国・朝鮮・日本では唯一の例である。日本では、68 代 後一条天皇 1016-1036 からである。なお、三国史記は 1145 年に編纂された。

ここで、次の作業仮説を設ける。

作業仮説 IIII06 百濟では父子兄弟相続である。また、同じ王朝では

同じ名前の王はいない。

前王との関係が父子兄弟以外のものが幾つか見られたことは指摘したが、もう少し、詳しくみることにする。

まず、温祚王から蓋婁王までは、親子で継がれている。

A: 温祚 1 → (元子) 多婁 2 → (元子) 己婁 3 → (子) 蓋婁 4

蓋婁王からは肖古王と古尔王が子であるが、離れているので分ける。

B: (蓋婁子) 肖古 5 → (長子) 仇首 6 → (長子) 沙伴 7 → (仇首二子) 比流 11

C: (蓋婁二子) 古尔 8 → (子) 責稽 9 → (長子) 汾西 10 → (長子) 契 12

D: (比流二子) 近肖古 13 以後は辰斯王と東城王を除いて親子

以上より、父子でつながっているもので分けてみれば、4つのグループに分かれる。

近肖古王の在位期間は 346 年から 375 年であり、D は馬韓の地の百濟と考える。

この4つのグループを組み合わせることを考える。作業仮説 IIII06 から、B と D を同じにはできない。また、B と C を繋ぐのは元に

戻ることになり、AB|CD と ACD|B の組み合わせが残る。

前者のストーリーは、AB と C の国があり、どちらかが吸収する形で D となった。作業仮説 IIII06 からは C が AB を吸収したほうを採りたい。一方、後者では、ACD の王朝が、B を吸収した。このとき、B の王の名前を借用した。

ACD|B と AB|CD を新しい方から見ると、D の上に B と C が並び、A は B の上か C の上かになる。B の上を A' とする。これを表にしたものが次の表 IIII05 である。この表における各王の在位期間は、3列にある () 内のものは、表 IIII04 のものである。2列のものは、近肖古王を基準として、表 IIII04 在位期間から逆算したものである。

A と A' の差は 36 年でそんなに大きい差ではない。正史に登場するのは D グループ以降であるから、前百濟を取り挙げない限り、本稿には殆ど影響はない。

表 III05 修正百濟王朝

A'				A			
温祚	55-100	(BC18-28)	46	温祚	91-136	(BC18-28)	46
多婁	100-149	(28-77)	50 元子	多婁	136-185	(28-77)	50 元子
己婁	149-200	(77-128)	52 元子	己婁	185-236	(77-128)	52 元子
蓋婁	200-238	(128-166)	39 子	蓋婁	236-274	(128-166)	39 子
B				C			
肖古	238-286	(166-214)	49 蓋婁子	古尔	274-326	(234-286)	53 蓋婁二子
仇首	286-306	(214-234)	21 長子	責稽	326-338	(286-298)	13 子
沙伴	306-306	(234-234)	1 長子	汾西	338-344	(298-304)	7 長子
比流	306-346	(304-344)	41 仇首二子	契	344-346	(344-346)	3 長子
近肖古	346-375		比流二子				

正史では、百濟は夫余や高句麗との関連が書かれている。これから、北に居た ACD 王朝が馬韓の地に居た B 王朝 を吸収したと考えたい。表 III05 からは、どちらにしても、尚古王の在位期間は 238 年から 286 年となり、卑弥呼・壹与に重なってくる。

7.5. 百済の成立

馬韓の地における百済の成立については、関連する記事で考え、作業仮説 IIII03 を得た。ここで、前百済の考察と共に、(馬韓の地の)百済の成立について改めて考えてみる。まずは、Wiki「温祚王」建国神話 から抜粋引用を行う。これらは三国史記温祚王紀前文と隋書・周書の建国部分の解説付き訳ともみられる。

Wiki「温祚王」建国神話：温祚王紀前文

温祚の父は鄒牟または朱蒙(高句麗の始祖)といい、北扶余から逃れて卒本扶余(遼寧省本溪市桓仁満族自治県)に着いた。扶余王は二番目の娘を嫁がせた。その後、扶余王が亡くなったので朱蒙が王位について、二人の子をなした。長子を沸流、次子を温祚といった。朱蒙が扶余にいたときの子(高句麗の第 2 代瑠璃明王)が太子となったため、沸流・温祚はこの太子に受け容れられないことを恐れて、烏干・馬黎らの 10 人の家臣と大勢の人々とともに南方に逃れた。漢山(京畿道広州市)まできて負兒嶽に上り、居留地として相応しいかどうかをみることにした。沸流は海浜に住みたいと言い出し、10 人の家臣はこの地が都とするに相応しいと諫めたが聞かず、引き連れた人々

を分けて、弥鄒忽(仁川広域市)まで行ってそこに国を建て、温祚は漢山の地で慰礼城(京畿道河南市)に都を置き、国を起こした。これが前漢の鴻嘉3年(BC18年)のことであり、初め10人の家臣に援けられたので国号を十済としたが、のちに沸流の下に従った人たちも慰礼城に帰属し、百姓を受け容れたので国号を百済と改めた。系譜が扶余に連なるので、氏の名を扶余とした。沸流が住んだという

漢山は漢城を連想し、京城と思っていたが、京畿道広州市と書かれている。「コネスト韓国地図」京城市の東15Km程に、漢江が北に凸状になった所に河南市があり、その南に広州市がある。両市の境の広州市側に南漢山城が見つかった。沸流が住んだという仁川市からは、少し回り道にはなるが、漢江を遡り到達できる。

漢字ペディア「済」のなりたち(角川新字源 改定新版)では

旧字は、形声。水と、音符齊(セイ)とから成る。もと、川の名。

借りて「わたる」、転じて「すくう」意に用いる。

とあり、済に人またはその集団の意味は書かれていない。これからは、幾つかの川を渡ったとなるのではないか。

Wiki「広州市（京畿道）」では

紀元前6年：慰礼城(現在のソウル)から西部面春宮里(現在の河南省)に首都を移し、河南慰礼城と呼んだ。370年：近肖古王25年まで376年間百済の都。

Wiki「温祚王」建国神話：温祚王紀前文の一書

百済の始祖は沸流王であり、父は優台といって北扶余王解扶婁の庶孫である。母の名は召西奴といって、卒本扶余の延陀勃の娘であり、はじめ優台のもとに嫁いで沸流・温祚の二人をなした。優台が死んでから召西奴は卒本で独り暮らしをしていたが、朱蒙が高句麗国を建てたのち、召西奴を引き寄せて王妃とした。国づくりの初期において王妃の功があったので朱蒙は王妃を愛で、沸流ら二人を我が子のよう待遇した。しかし、朱蒙が扶余にいた時に礼氏との間に儲けた子の解儒留(瑠璃明王)が来ると解儒留を太子とし、朱蒙の死後は解儒留が王位を継いだ。そこで沸流は温祚とともに別に国を建てることを図り、家臣を率いて高句麗を逃れて涇水(清川江)・帯水(漢江)を越え、弥鄒忽に至ってそこに住んだ。

Wiki「温祚王」建国神話：隋書

百済の祖先は高麗国(高句麗)から出た(以下、扶余の建国神話である東明伝説を要約したと見られる記事が続く。)

東明の後に仇台という慈悲深い人が現れた。初めは国を帯方郡の故地に建てたが、後漢の遼東太守の公孫度が娘を嫁がせ、東夷の強国となった。百家とともに海を渡ったのに因んで百済と号した。

Wiki「温祚王」建国神話：周書

隋書(656年)よりわずかに早く編纂された周書(636年)には、

百済の祖先は恐らく馬韓の属国であり、夫余の別種である。仇台というものがあって、帯方郡の地に国を興したとある。井上訳注本では、三国志夫余伝の「漢末に公孫度が勢力を増したとき、夫余王の慰仇台が遼東郡に服属した。公孫度が高句麗・鮮卑を牽制するために一族の娘を夫余王の妻とした」という記事を、隋書が誤って百済の記事に混同させたものとする。

Wiki「温祚王」治世(温祚王紀記年記事の抄訳)

建国の初めより東北辺に接する靺鞨に対する防衛の意識が強く、城柵を築いてこれに備えていた。靺鞨からは前後7回にわたる侵攻を受け、いずれも撃退している。特に前1年に侵攻を受けた際には、

迎撃してその酋長の素牟を捕らえている。南方では馬韓との間に初めは親密な関係を保っていたが、瑞祥を得て馬韓・辰韓を併呑する気になり、後8年から後9年にかけて馬韓を急襲してこれを滅ぼした。後に後16年には馬韓の旧将が反乱を起こしたので王自ら討伐し、これを鎮圧した。北方では前15年に楽浪郡に使者を送って国交を開いたが、防備のための城柵を築いたことを咎められ、前11年7月には和親が失われた。

このように北方・東北方の国防の観点から、前5年には都を漢水の南に移しており、漢水の西北に城郭を築いた。前2年には楽浪郡の侵攻を受けて、旧都の慰礼城を焼かれている。温祚王の一代を通じて、その領域は北は涓水(清川江)、東は走壤(江原道春川市)、西は黄海に至った(南は未詳)。

この記事は色々疑問となる内容を含んでいる。一番大きいものは「後8年から後9年にかけて馬韓を急襲してこれを滅ぼした。」である。一方、後漢書・三国志・晋書と滅ぼした馬韓が取り挙げられている。楽浪郡の近くにこのよう国があった場合、郡の記録に書かれたはずである。

7章の序で温祚王紀の次の記事を取り挙げた。

**温祚王十三年 BC5 遣使馬韓 告遷都 遂畫定疆場 北至河 南限熊川
西窮大海 東極走壤**

また、ある時に馬韓かその周辺の地を領有し、馬韓にこのような通告をした、すなわち、馬韓の地を征服(攻略)したことは考えられるとした。

これが「温祚王」治世の「前5年には都を漢水の南に移しており、漢水の西北に城郭を築いた。」に対応するであろう。

これからは、温祚王が建国したのは馬韓の地以外ということになる。また、楽浪郡は BC100 年頃に、帯方郡は 200 年頃に設置され、313 年まで存続した。この間に馬韓の地に国が造られれば、記録に残るはずである。

また、靺鞨は現在の北朝鮮の北東部に居たことになっている。ここと馬韓の間には、楽浪郡の東部都尉が治める嶺東七県がある。これを挟んで抗争があれば、楽浪郡の記録に残るはずである。

さらに、馬韓の諸国は帯方郡の直接のコントロール下に置かれていたのではと述べた。

これらから、温祚王の初めに造った国は、靺鞨と頻繁に抗争が可能で、楽浪郡や帯方郡に興味を興させない土地、すなわち、楽浪郡の北から東にあったことになる。この地は高句麗の東隣となる。

周書と隋書の記事の仇台を考える。

始國於帶方と始立其國于帶方故地を「帯方で国を始めた」とした。すなわち、百済王の仇台が帯方の地に建国した。帯方故地は「帯方郡のあった地」と理解している。これが、馬韓の地を含むかが疑問であるが、三国志では馬韓が扱われていることから、馬韓は帯方故地には含まれないと考える。

ここで、仇台が百済の王の誰かが課題となる。王名に仇の付く王は仇首王と近仇首王である。在位期間と作業仮説 IIII03 から、可能性のあるのは近仇首王となる。

ピンイン 仇: chóu、台: tái、首: shǒu、須: xū、句: jù

作業仮説 IIII03 の下限 369 年は、高句麗本紀の記事

故國原王三十九年 369 王以兵二萬 南伐百濟 戰於雉壤 敗績

による。百済本記からの 369 年の百済王は近尚古王 346-375 である。

313年の百済王は、百済本記(表 IIII04)からは比流王、修正系譜(表 IIII05)からは、比流王と古尔王になる。ACD/B説からは、古尔王としたい。

周書に書かれている五方の中で位置が分かっているのは熊津城で、公州とされている。他の城は公州以南となる。

これから、次のストーリーを想いつく。

古尔王の時代に(遼西)から馬韓以南に移住し、馬韓の地を勢力下においた。近尚古王の時代に勢いを増し、高句麗の制圧の対象となった。369年に高句麗を破ったことにより、372年に晋に朝貢した。このとき、国名が韓諸国の名前ではなかったため、韓条には入れられなかった。近仇首王の時代には帯方の故地を都とした。

8. 新羅の王統

新羅のイメージについて、一般的には「朝鮮三国の1つであり、唐の高句麗と百済の平定のもとに朝鮮を統一し、慶州を都としていた」というものであろう。統一新羅の時代にも、安東都護府が668年から756年まであったということは知られていない。これは、形式的なものかもしれないが、唐による朝鮮の二重統治といえる。

武烈王と文武王により統一新羅は形成された。このとき、よく知られている白村江の戦いで日本(倭)・百済連合軍が唐・新羅連合軍に破れ、この後百済は滅び、日本(倭)は朝鮮から撤退した。

新羅の建国も、百済と同様に、はっきりしない。正史に登場するのは、百済よりさらに遅く、梁書の521年である。

8.1. 正史の記事（新羅の出自を主に）

新羅が正史に現れるのは、梁書・隋書・(新、旧)唐書と南史・北史である。梁は 502 年から 557 まで続いた南朝の王朝で、楽浪郡と帯方郡が滅びた 313 年からは 200 年程後の王朝である。したがって、朝貢は各国が直接都へ派遣したことになり、正史の記事は使者への質問が基礎になっていたと考える。したがって、それなりに根拠のある話とみなせるのではないか。地勢は各王朝が存在していた時のものとする。出自に現れる地名は、前百済・前新羅のものの可能性が高いと考える。ここでは原則として、唐書は検討の対象から外すことにする。

まずは、梁書の記事を見ていこう。

普通二年 521 王募名秦 始使使隨百濟奉獻方物

姓が募名が秦の王が百済に帯同して奉獻してきた。

が正史における新羅の記年記事の初出である。この記事の前に次が書かれている。

新羅者 其先本辰韓種也 辰韓亦曰秦韓 相去萬里 傳言秦世亡人避役
來適馬韓 馬韓亦割其東界居之 以秦人 故名之曰秦韓 其言語名物有
似中國

新羅の祖先は本の辰韓の一つである。辰韓は秦韓ともいう。都より1万里の
所にある。言い伝えでは、秦の時代に難民が役を避けて馬韓に来た。馬韓はそ
の東の界に住まわせた。秦の人であることにより秦韓と呼んだ。その言葉や物
の名で中国に似たものがある。

辰韓始有六國 稍分爲十二 新羅則其一也 其國在百濟東南五千餘里
其地東濱大海 南北與句驪 百濟接 魏時曰新盧 宋時曰新羅 或曰斯
羅 其國小 不能自通使聘

辰韓は初め6国であったが12国になった。新羅はその1つであり、百済の
東南5000里余りの所にあった。東は大海に臨み、南北は句驪と百済に接して
いる。魏の時は新盧といい、宋の時は新羅または斯羅といった。国は小さく、
自ら使いを送ることはできない。

梁の都は建康(建業、南京)である。

秦の時代の難民はともかく、徐福のような人が他にもいたということ
を見た記憶がある。これが正しければ、そのような人が辰韓(の国)

を造ったのかもしれない。

新羅を辰韓の後裔としている。始有六國 稍分爲十二國 は三国志にも書かれている。新羅則其一也 と 新羅者 其先本辰韓種也 は同じことを言っていると思われる。其一 は 六國 の一なのか 十二の一なのか。その他の記事は三国志と晋書の内容に含まれる。

位置に関しては、初めは馬韓の東界に居住したとある。引用の後半では百済の東南、あるいは、南となっている。12国になったのが、新たに6国が加わり、幾つかは北の方、幾つかは南にあったとすれば、説明がつく。新盧・新羅・斯羅はそれらの国の1つ可能性があるのか。ただし、辰韓の南は弁韓(弁辰)があったので、辰韓がこの地を侵略したことになる。

其國小 不能自通使聘 から、単独では朝貢できなかったため、他国に帯同したということになる。普通二年 521 の記事では百済に付随したと書かれている。

隋書の記事を見ていく。

新羅國 在高麗東南 居漢時樂浪之地 或稱斯羅 魏將毋丘儉討高麗
破之 奔沃沮 其後復歸故國 留者遂爲新羅焉 故其人雜有華夏 高麗
百濟之屬 兼有沃沮 不耐 韓濊之地 其王本百濟人 自海逃入新羅 遂
王其國

新羅は高麗の東南で韓の時は樂浪郡に属する地であり、斯羅とも称した。魏の將軍毋丘儉 -255 が高麗を打ち破った時、(高句麗は)沃沮に逃げ、その後故国に帰った。留まったものが、新羅を造った。故にそこの人々は、中国・高麗・百濟の人も混じっている。さらに沃沮 不耐 韓濊訖の人もある。その王は本は百濟の人であった。海に逃げ新羅に来て、その王となった。

傳祚至金真平 開皇十四年 594 遣使貢方物

金真平の代になって、使いを派遣した。

この隋書の記事は興味深いことが書かれているが後で考察する。

南史では、梁書とほぼ同じことが書かれている。出自の詳しくは北史を見よと書かれている。

北史では殆どが隋書と同じ記事であるが、次の記事は隋書にない。

初附庸於百濟 百濟征高麗 不堪戎役 後相率歸之 遂致 強盛 因襲百

濟 附庸于迦羅國焉

初めは百済に附庸した。百済が高麗を攻めたとき従わず兵を帰した。後に強勢となって百済を襲い、迦羅國を附庸した。

位置と由来は殆どが梁書と同じであるが、次の記事は上記隋書の記事と同じようだが、其先 と 初 は若干ニュアンスが異なる。初 は新羅の初めであるが、其先 は新羅になる前のことと理解する。

goo 国語辞書「ふ-よう【付庸／附庸】の意味」では「宗主国に従属してその保護と支配を受けている国。従属国」とある。

旧唐書では

新羅國 本弁韓之苗裔也 其國在漢時樂浪之地 東及南方俱限大海 西接百濟 北鄰高麗

新羅は弁韓の末裔である。その国は漢の時の樂浪郡の地にある。東と南は大海があり、西は百済と接し、北隣は高麗である。

と書かれている。新唐書は大筋は旧唐書と同じである。

武徳四年 621 王真平遣使者入朝 王真平が使いを派遣し朝貢した。

隋書の 毌丘儉討高麗 についてみる。

三国志魏書三少帝紀には

**正始七年 246 二月 幽州刺史毌丘儉討高句驪 夏五月 討濊貊 皆破之
韓那奚等數十國各率種落降**

二月、幽州の刺史毌丘儉が高句麗を討った。五月、濊貊を討ち、これらを皆破った。韓の数10国が投降した。

と書かれている。なお正始四年には 十二月 倭國女王倭彌呼遣使奉獻 の記事がある。

烏丸鮮卑東夷傳では、高句麗条にはなく東沃沮条に書かれている。

**毌丘儉討句麗 句麗王宮奔沃沮 遂進師擊之 沃沮邑落皆破之 斬獲首
虜三千餘級 宮奔北沃沮 北沃沮一名置溝婁 去南沃沮八百餘里 其俗
南北皆同 與挹婁接 挹婁喜乘船寇鈔 北沃沮畏之 夏月恆在山岩深穴
中爲守備 冬月冰凍 船道不通 乃下居村落 王頡別遣追討宮**

毌丘儉が句麗を討った。句麗王宮は沃沮に奔走したが、軍を進めこれを撃った。沃沮の村落は皆これを破り、3000人の首を斬った。宮は北沃祖に奔走した。・・・王頡は別軍を派遣し、宮を追討した。

高句麗本紀東川王紀には

二十年 246 八月 魏遣幽州刺史母丘儉 將萬人 出玄菟來侵

魏は幽州刺史母丘儉に將萬人を付けて出撃し、玄菟郡に來侵した。

十月 儉攻陷丸都城 儉は丸都城を攻め陥した

二十一年 247 王以丸都城經亂 不可復都 築平壤城

丸都城を復旧することが難しく、平壤城を築いた。

があり、正始七年の記事に対応する。この時は樂浪郡があり、その郡衙は平壤であるので、ここで築かれた平壤城は別のところにあったはずである。

東川王紀には

十九年 245 十月 出師侵新羅北邊 兵を出し、新羅の北邊を侵した。

という記事が書かれている。隋書の記事は母丘儉が高句麗を攻めた後に、沃祖に留まったものが新羅を為したとあったが、上記記事は、その前年に高句麗が新羅の北邊を侵したことになる。今のところは、留まったものが、新羅を乗っ取ったと解釈しておこう。これを前新羅とするかは保留としておく。

この新羅は何処にいたのか。樂浪郡衙が何と呼ばれていたか。魏の

派遣軍に追われたのであるから、樂浪郡の郡衙の近くではない。

高句麗が樂浪郡の南を攻めることは出来ないはずである。

沃沮に留まった者について考える。

沃沮はかなり北で北朝鮮の咸鏡道辺りにいた(Wiki)。造った場所は沃沮の地と考えるのが自然である。これは、今までに思っていた前新羅、あるいは朴王朝、の位置とは近い。造った後南下したならば合うかもしれない。

隋書の記事 其王本百濟人 自海逃入新羅 遂王其國 を考える。

其王は新羅の王と考える。留まったものが新羅を乗っ取り、王となったとすれば、時期は 246 年よりそれほど離れていないことになる。この時の百濟は馬韓の地にはなく、上の前新羅と共に、沃沮に近い位置にあったとするしかない。このとき、北史の 初附庸於百濟百濟 ということはある。百濟征高麗 不堪戎役 以後は%%新羅成立後の話と考えればよいのではないか。

8.2. 新羅本記の王統 (3つの姓)

既に取り挙げた正史で、新羅の王名が書かれているものを再掲する。

普通二年 521 王募名秦 始使使隨百濟奉獻方物 (梁)

傳祚至金真平 開皇十四年 遣使貢方物 (隋)

武德四年 621 王真平遣使者入朝 (唐)

本稿の立場では、正史から確認できるのは 26 代真平王以降で、それ以前は、三国史記から王統を調べるべきであるが、現状ではこれを試みる余裕はなく、Wikipedia から得た王統を表 IIII06 新羅の王統とする。

ここで、王の姓は Wiki から得た。この表の最後の文武王の在位期間は 661 年から 681 年であり、この王からが統一新羅の時代となる。続柄は新羅本記から得た。また、王に相当する所に、居西干・次次雄・尼師今・麻立干らが用いられているが、これらは省略した。(居西干は初代、次次雄は 2 代、尼師今は 3-18 代、麻立干は 19-22 代、23 代以降は王)

表 III06 新羅の王統

1 赫居世	朴1	16 訖解	昔8	奈解孫
2 南解	朴2 赫居世嫡子	17 奈勿	金2	仇道葛文孫
3 儒理	朴3 南解太子	18 実聖	金3	闕智裔孫
4 脱解	昔1	19 訥祇	金4	奈勿子
5 婆娑	朴4 儒理第二子	20 慈悲	金5	訥祇長子
6 祇摩	朴5 婆娑嫡子	21 炤知	金6	慈悲長子
7 逸聖	朴6 儒理長子	22 智証	金7	奈勿曾孫
8 阿達羅	朴7 逸聖長子	23 法興	金8	智証元子
9 伐休	昔2 脱解子仇鄒子	24 眞興	金9	法興弟立宗子
10 奈解	昔3 伐休孫	25 眞智	金10	眞興次子
11 助賁	昔4 伐休孫	26 眞平	金11	眞興太子銅輪子
12 沾解	昔5 助賁同母弟	27 善徳	金12	眞平長女
13 味鄒	金1	28 眞徳	金13	眞平母弟國飯女
14 儒礼	昔6 助賁長子	29 武烈	金14	眞智子伊龍春子
15 基臨	昔7 助賁孫	30 文武	金15	武烈元子

表 III06 で、3 つ姓が偏在していることが目につく。詳しく言えば、初代から 8 代までは 4 代の脱解尼師今の昔氏を除けば朴氏であり、9 代から 16 代までは 13 代の味鄒尼師今の金氏を除けば昔氏であり、17 代以降は金氏である。

他の姓の中に一人ある王で昔王朝の初代王の脱解尼師今と金王朝の初代王の味鄒尼師今について新羅本紀の記事を見ることにする。

第4代 脱解尼師今については、前文に次が書かれている。

脱解本多婆那國所生也 其國在倭國東北一千 初其國王 娶女國王女
爲妻 有娠七年 乃生大卵 王曰 人而生卵不祥也 宜棄之 其女不忍
以帛裹卵並寶物置於櫝中 浮於海 任其所往 初至金官國海邊 金官人
怪之不取 又至辰韓阿珍浦口 是始祖赫居世 在位三十九年也 時海邊
老母 以繩引擎海岸 開 見之 有一小兒在焉 其母取養之 及壯身 長
九尺 風神秀朗 知識過人 或曰 此兒不知姓氏 初櫝來時 有一鵲飛鳴
而隨之 宜省鵲字 以昔爲氏 又解韞櫝而出 宜名 脱解

脱解は多婆那國の生まれである。その国は倭国の東北千里にある。多婆那國
王は娶女國の王女を妻とした。彼女は妊娠7年で大きな卵を産んだ。人々は不
祥としてこれを棄てるようにいったが、彼女は帛の袋に入れ海に流した。卵は
金官国の海辺に流れ着いた。金官の人はこれを怪しんで放置した。卵は辰韓の
阿珍浦口に流れ着いた。これは始祖の赫居世の在位三十九年のことである。老
母が繩を用いて引き上げ、これを開けたら子供がいた。老母はこの子供を養っ
た。・・・脱解と名付けた。

この記事に現れる国は多婆那国、倭国、娶女国、金官国、辰韓(阿
珍浦口)である。

これらの間の位置に関する情報を拾っていく。まず多婆那国は倭

の東北 1000 里の所にある。逆にみれば、倭は多婆那国の南西にあったことになり、方角的には朝鮮半島に倭があったことになる。海岸線が南西から北東になっていると言えるのは釜山から西の部分である。

多婆那国から流れた卵が金官国を経て辰韓の阿珍浦口に流れ着いた。海流は東から北の間の方向に流れている。これより、金官国は多婆那国の北東から北の間と考える。金官国と辰韓の位置関係も同様と考える。この金官国は釜山辺りで洛東江の西側とされている。辰韓の阿珍浦口についてはそれを比定する文献は見出していない。

上記脱解王の記事を読んだ時の第一印象は、これはまるで王朝の始祖伝説ではないかということである。また、桃太郎伝説を思い浮かべる。桃太郎は始祖伝説の変形なのか。鬼を成敗して宝を持って帰るのは、強盗ではなく交易で財を成したのかもしれない。吉備と物部氏は関係があるとも言われている。朝鮮由来かもしれない伝説が吉備にのこっていることになる。これに関して色々な疑問が出てくるが、このノートでは扱える範囲外としておく。

脱解についての記事は、第 2 代 南解次次雄紀に

五年 166(61) 王聞脱解之賢 長女妻之

王は脱解の賢さを聞き、長女の妻とした。

七年 168(63) 以脱解爲大輔 委以軍國政事

脱解を大輔とし、軍事と国政を任した。

などが書かれている。また、朴姓の第3代儒理尼斯今は南解太子で、第5代婆娑尼師今は儒理王第二子である。一方、第9代伐休尼斯今は昔氏で脱解王子仇鄒角干之子と記されている。これは、朴氏の王朝の後に脱解を始祖とする昔氏を姓とする王朝を組み込む操作が行われたと考える。

七年の記事から、大輔という宰相の様な官位があったことになる。これは、百済の達卒、および、倭の大夫と大卒と同じではないかと考えている。

ぴんいん 大輔: dà fǔ、達卒: dá cù/zú、大夫: dà fū

脱解が流れ着いたのは辰韓であり、新羅とは書かれていない。朴王朝と昔王朝が別の王朝であったとすれば、脱解を初代とする昔王朝は辰韓の地にあったと考えざるを得ない。先に金官に流れ着いたことは、一時的に金官にいたことを示している。あるいは、父母などの近い先祖が金官国の出身であったかもしれない。

このとき、朴王朝は何処にいたか。これも辰韓の一国であった可能性が高い。では、斯盧國はどちらか。

辰韓が6国から12国になったことを考慮すれば、朴王朝は初めの6国の地にあり、昔王朝は増えた6国の地にあったとすれば、一応の解釋にはなるが、作業仮説とするほどの確信は得ていない。

金王朝の最初の王第13代味鄒尼斯今262-284について見ていく。

味鄒尼師今立 一云味照 姓金 母朴氏 葛文王伊柒之女 妃昔氏光明夫人 助賁王之女 其先闕智 出於雞林 脱解王得之 養於宮中 後拜爲大輔 闕智生勢漢 勢漢生阿道 阿道生首留 首留生郁甫 郁甫生仇道 仇道則味鄒之考也 沾解無子 國人立味鄒 此金氏有國之始也

味鄒尼師今が立った。味照ともいう。姓は金氏である。母は朴氏で、葛文王の伊柒の娘である。妃は昔氏の光明夫人で、助賁王の娘である。先祖は闕智で雞林の出である。脱解王は闕智を得て宮中で育てた。勢漢は闕智の子である。阿道は勢漢の子である。首留は阿道の子である。郁甫は首留の子である。仇道は郁甫の子である。仇道は味鄒の父である。沾解は子が無く、國人は味鄒を王とした。これが金氏が国王となる始めである。

とある。ここで、沾解は味鄒の前の王である。

朴氏と昔氏の政権を引き継ぐ格好の姻戚関係である。最後は金王朝の始祖ということか。さすがに時代が下がるのか、始祖伝説なものは書かれていない。これに代わって、次の脱解王の大輔となった闕智から始まる系譜が書かれている。

闕智→勢→首留→郁甫→仇道→味鄒

ここでは ○○生△△ で続いているので、親子で続いている。ここで、仇道則味鄒之考也 を 仇道は味鄒の父 とした。この話は継体天皇紀を想い浮かばせる。

次の金氏の王である第 17 代奈勿尼斯今では

**仇道葛文王之孫也 父末仇角干 母金氏休禮夫人 妃金氏 味鄒王女
訖解薨 無子 奈勿繼之末仇 味鄒尼師今 兄弟也**

葛文王仇道の孫で、父は末仇である。母は金氏の休禮夫人で、妃は金氏で味鄒王の娘である。訖解が薨じたとき、子が無く、奈勿がこれを継いだ。末仇は味鄒尼師今の兄弟である。

と書かれている。訖解は奈勿の前の王である。味鄒の在位期間は 262 年から 284 年で、奈勿の在位期間は 356 年から 402 年であり、妃の金氏が味鄒王の娘とするのは、年齢的に無理があると思われる。

Wiki「葛文王」では

葛文王は、新羅における王族の称号のひとつ。三国史記からは、王位にはつけなかった王の父や王の舅などに尊称として与えられたものと考えられている。発生の経緯や機能については未詳であり、新羅本紀に見られる最も早い封号の例は第7代逸聖尼師今15年(148年)のことであり、「新羅での王の追封はすべて葛文王と称されるが、その意味はよくわからない」と分注にも記されている。また、三国史記職官志には「名称はしばしば現れるが、初めて設置された時期や位の高下のわからないもの」の筆頭として記されている。

第22代智証麻立干の時代に王号を麻立干から王に定めたと伝えられているが、1989年に発見された迎日冷水碑文によると、智証王が503年9月時点では王ではなく葛文王と称されていたことが判っている。また、1988年に発見された蔚珍鳳坪碑文には、第23代法興王が524年の時点で寐錦王の名で登場しており、同時に葛文王の名も見られる。このことから、6世紀の新羅では寐錦王・葛文王が並存しており、葛文王が寐錦王を補佐する関係にあったとも考えられている。

Wiki「新羅」に

韓国の研究者の中には、積石木槨墳(新羅の墓制)の副葬品と遊牧民族の副葬品との類似を指摘する意見がある。したがって韓国には、新羅の金氏王族が匈奴から渡来した或いは新羅人は匈奴の血を引いているなどの主張をする人物がいる。

Wiki「金日テイ」も、「匈奴起源は疑わしいが、匈奴を扶余に置き替えれば一考の余地がある。」と書かれている。

新羅本紀赫居世居西干紀 の前文を見ていく。

始祖 姓朴氏 諱赫居世 前漢孝宣帝 五鳳元年甲子 四月丙辰一日正月十五日 即位 號居西干 時年十三 國號徐那伐 先是 朝鮮遺民 分居山谷之間爲六村 一曰闕川楊山村 二曰突山高墟村 三曰觜山珍支村或云干珍村 四曰茂山大樹村 五曰金山加利村 六曰明活山高耶村 是爲辰韓六部

始祖の姓は朴氏で諱は赫居世である。前漢の孝宣帝の五鳳元年 BC57 甲子四月丙辰、あるいは正月十五日ともいう、に即位し、居西干と名のつた。このとき 13 歳であった。国名を徐那伐とした。是より先、朝鮮の遺民が谷間に分か

れて住み、六つの国を造った。(6個の国名)これらを辰韓六部とした。

次は Wiki「新羅」の朴氏の始祖説話で、赫居世居西干紀 の前文の上
に続く文のほぼ訳なので、一部修正し、引用する。

高墟村長の蘇伐公が蘿井の林で馬の嘶くのが聞こえたので近寄ったところ、馬が消えて大きな卵があった。卵を割ると中から幼児が出てきて育て上げたが、10歳を越えた頃、彼の出生が神秘的であったことから六村の人たちは彼を王位につけた。卵が瓠ほどの大きさであったため、辰韓の語で瓠を表す朴を姓として名乗った。

赫居世の造った国の名が徐那伐ということで新羅ではない。何故新羅の始祖としているのか。

ぴんいん 干: gān/gàn、汗: hàn、徐那伐: xúnàfá

これは、三国志での辰韓の古老のいう事と異なる。六村の名前から山・川までと村をとった部分は

楊山・高墟・珍支(干珍)・大樹・加利・高耶

である。この辰韓六部が辰韓の初めの6国のことか。三国志の辰韓・弁辰 24 国のうち弁辰の付かない 12 国、已柢國、不斯國、勤耆國、難彌離彌凍國、軍彌國、如湛國、戸路國、州鮮國(馬延國)、冉奚國、斯

盧國、優由國に上記六部に対応する国があるとも思えない。このことから、赫居世の造った国は辰韓には無かったということになる。東川王紀十九年 245 十月 出師侵新羅北邊 とすればいいのかもしれない。

3つの王朝の関係はという疑問は当然である。金王朝は統一新羅として滅亡する 760 年頃まで続く。新羅本記の対外記事には、東沃沮や靺鞨などの北方の東夷諸国との記事と、倭や伽耶などの南方の東夷諸国との記事が初期から見られる。これから、朴王朝は北方で、昔王朝は南方で併存していたと考えられる。これを作業仮説としておく。

作業仮説 IIII07 朴王朝と昔王朝が併存していた。金王朝が両者を併合した。

この作業仮説に基づいて作成したのが次表である。

表 IIII07 新羅の修正王統

				昔王朝			
朴王朝				1 脱解	162-185	24	57-80
1 赫居世	117-177	61	BC57-4	2 伐休	185-197	13	184-196
2 南解	177-197	21	4-24	3 奈解	197-231	35	196-230
3 儒理	197-230	34	24-57	4 助賁	231-248	18	230-247
4 婆娑	230-262	33	80-112	5 沾解	248-262	15	247-261
5 祇摩	262-284	23	112-134	6 儒礼	262-276	15	284-298
6 逸聖	284-304	21	134-154	7 基臨	276-288	13	298-310
7 阿達羅	304-334	31	154-184	8 訖解	288-334	47	310-356
金王朝							
1 味鄒	334-356	23	262-284				
2 奈勿	356-402	47					
3 実聖	402-417	16					
4 訥祇	417-458	42					
5 慈悲	458-479	22					
6 炤知	479-500	22					
7 智証	500-514	15					
8 法興	514-540	27					

8.3. 新羅追考

新羅が隋以前に朝貢したのは普通二年の梁のみである。百済は東夷伝のない珍と北齊を除いて晋から隋までの全てに朝貢している。高句麗は晋書を除く全てに、倭は北朝の魏書・周書を除く全てに書かれている。これは百済と新羅を考えるうえで、何らかの参考となるかもしれない。また、倭が南朝にのみ朝貢したのも興味あることである。例えば、倭と新羅が高句麗・百済より仏教の伝播が送れたのは北朝に朝貢していなかったことによると考える。

新羅本記の朴王朝や昔王朝の本記には幾つかの地名が現れる。これらの地名が特定できれば、多くの疑問の解消に役立つが、中国語・朝鮮語の知識、とくに音感、がないためこれは難しい。

国号に関しては2つの記事が新羅本記にある。1つは

昔 7 基臨尼師今十年 285, 307 復國號新羅 国号を新羅に戻した。

復國號新羅 の前は何といていたのか。楽浪郡と帯方郡が減びる少し前である。

もう1つは

智證麻立千四年 503 羣臣上言 始祖創業已來 國名未定 或稱斯羅 或稱斯盧 或言新羅 臣等以爲 新者德業日新 羅者網羅四方之義 則其爲國號宜矣 又觀自古有國家者 皆稱帝稱王 自我始祖立國 至今二十二世 但稱方言 未正尊號 今羣臣一意 謹上號新羅國王 王從之

(大意) 国名は定まっていず、斯羅・斯盧・新羅の3つの国名を称してきたが、今後は新羅とする。

ピンイン 斯羅: sī luo、斯盧: sī lú、新羅: xīn luo

このうち、斯盧國は三国志の弁辰韓二十四國の中にある

何故・どの様に3つの国名を称したのか。時系列的に順に用いたのではない。3つの王朝を統合・踏襲したと考えるのが妥当であろう。

新羅の出自については、梁書は辰韓の出で、隋書は高句麗の出、唐書は弁韓の出となっている。これは非常に奇異なことに見える。これらの情報は使者が質問に応じて答えが基となっているのではないかと考えている。時期的には、全て金王朝の基での使節であるが、使者は異なり、使者がもつ伝承を伝えたのではないか。梁書では 始使使隨百濟奉獻方物 とかかれ、百濟の使いに帯同したとあり、百濟系の

情報。唐書の記事は、時期から、金王朝のもの。隋書の記事は高句麗系ものと言えれば面白いのだが、現状ではその判断には躊躇している。

このようなことが可能となるためには、表 III07 の並立状態ではなく、もう少し複雑な並立状態から、金王朝による制覇を考える必要がある。試案としては、始祖の位置を表 III06 の位置にすることである。すなわち、金王朝の味鄒尼師今を昔王朝の沾解尼師今と儒礼尼師今の辺り、昔王朝の脱解尼師今を朴王朝の儒理尼師今と婆娑尼師今の辺りに置くことである。これが成り立てば、倭の五王に関しても新たな解釈が可能となる。

試みに、味鄒尼師今と儒礼尼師今の即位年を合わせた後、脱解尼師今と婆娑尼師今の即位年を合わせ、他は在位年数より算出して得たものが表 III08 である。

王募名秦が朝貢した普通二年 521 の王は法興王 514-550 であり、王号の尼師今や麻立干を廃して、王を名乗った王でもある。智證麻立干 200-514 は法興王の父で前の王である。

表 III08 新羅の再修正王統

1 赫居世	111-171		
2 南解	171-191		
3 儒理	191-244		
4 婆娑	244-276	1 脱解	244-267
5 祇摩	276-298	2 伐休	267-279
6 逸聖	298-318	3 奈解	279-303
7 阿達羅	318-328	4 助賁	303-320
		5 沾解	320-334
		1 味鄒	334-356
		2 奈勿	356-402
		3 実聖	402-417
		4 訥祇	417-458
		5 慈悲	458-479
		6 炤知	479-500
		7 智証	500-514
		8 法興	514-540
		6 儒礼	336-348
		7 基臨	348-360
		8 訖解	360-406

母丘儉討高麗 は正始五年 244 であった。表 III08 「新羅の再修正王統」からは、この年の王は朴王朝第 4 代の婆娑尼師今か昔王朝の始祖脱解尼師今となる。

留まった地は蓋馬高原ではなかったか。ここならば沃祖の地でも不自然とは言えないであろう。これが南下して辰韓の地で国を造ったとすれば、隋書のいう高句麗の出も考えられる。

インテルメディアオ (Part II・Part III あとがき)

この2つの parts では、まず、倭条の前に書かれている韓条をみた。続いて、筆者の中国に対して抱いているイメージにウィキペディア(Wikioedia 日本語)の記事を引用することにより、まとめることにより、古代中国の歴史の概略とすることを目指した。ここまでが Part II である。

Part III では、高句麗・百済・新羅の王統を考えた。王統からみた三国史記の各国の記事の古代の記事の信頼度は

高句麗>百済>新羅・日本書紀

である。後漢書・三国志・晋書に書かれている扶余も興味あるが記事を抜き出した状況で留まっている。後漢書・三国志では5人の扶余王の名前が書かれている。倭王は3人である。

本 part では、三国の出自と王統を考察し、百済の修正王統と新羅の修正王統を2つ作成した。これらの(否定を含めた)検討が必要となる。

修正の対象となったのは、正史に朝貢の記事が現れる前のことである。また、修正王統は王統の組み替えであり、王の(時期的)移動を

行うことにより得られたものである。このとき、各王紀の記事の処理については3通りが考えられる。1つは、他国と関係するもので、記年は変えることは難しく。この種の記事は、移ってきた王の記事となる。次は、当該王固有のもの。言い換えれば、他の王の記事とはできないもの。こちらは、王と共に移動する。最後は、上記以外のもの。言い換えれば、どちらでもいいもので、これは、どちらかにでも配分することが可能となる。

今後の予定は

9. 九州支配 (崇神天皇 - 神功皇后、晋書の時代)
10. 宋書の時代 (倭の五王)
11. 神武東征 (神武天皇紀)

である。

ここで修正王統の扱いについては。次のように考えている。

百済本記の倭の記事は 阿莘王六年 397 王與倭國結好 以太子腆支爲質 が初出であり、百済本記の倭の記事の引用は問題ないと考える。

一方、新羅に関しては、3王朝の殆どの王紀に倭に関する記事が書

かかれている。なお、倭に関する記事は倭国・倭兵・倭人と3通りの書き方が為されている。

三国史記の検討は倭の五王(倭の東遷)を扱った後に行う予定である。それまでは、新羅の記事は修正王統を念頭において、引用することにする。

%%%

付録Ⅰ 三国史記の各国の初代王の前文

三国史記高句麗東明聖王紀

始祖 東明聖王 姓高氏 諱朱蒙 【一云鄒牟 一云衆解】 先是 扶餘王 解夫妻老無子 祭山川求嗣 其所御馬至鯤淵 見大石 相對流淚 王怪之 使人轉其石 有小兒 金色蛙形 【蛙 一作蝸】 王喜曰 此乃天賚我 令胤乎 乃收而養之 名曰金蛙 及其長 立爲太子 後其相阿蘭弗曰 日者天降我曰 將 使吾子孫立國於此 汝其避之 東海之濱有地 號曰迦葉原 土壤膏腴宜五穀 可都也 阿蘭弗遂勸王 移都於彼 國號東扶餘 其舊都有人 不知所從來 自稱天 帝子解慕漱 來都焉 及解夫妻薨 金蛙嗣位 於是時 得女子於太白山南優渤水 問之 曰 我是河伯之女 名柳花 與諸弟出遊 時有一男子 自言天帝子解慕 漱 誘我於熊心山下 鴨邊室中私之 即往不返 父母責我無媒而從人 遂謫居優渤水 金蛙異之 幽閉於室中 爲日所 引身避之 日影又逐而之 因而有孕 生一 卵 大如五升許 王棄之與犬豕 皆不食 又棄之路中 牛馬避之 後棄之野 鳥覆翼之 王欲剖之 不能破 遂還其母 其母以物裹之 置於暖處 有一 男兒 破 殼而出 骨表英奇 年甫七歲 嶷然異常 自作弓矢射之 百發 百中 扶餘俗語 善射爲朱蒙 故以名云 金蛙有七子 常與朱蒙遊戲 其

伎能皆不及朱蒙 其長子 帶素言於王曰 朱蒙非人所生 其爲人也勇 若不早圖 恐有後患 請除之 王不聽 使之養馬 朱蒙知其駿者 而減食 令瘦 駑者善養令肥 王以肥者自乘 瘦者 給朱蒙 後獵于野 以朱蒙善射 與其矢少 而朱蒙殪獸甚多 王子及諸臣又謀殺之 朱蒙母陰知之 告曰 國人將害汝 以汝才略 何往而不可 與其遲留而受辱 不若遠適 以有爲 朱蒙乃與烏伊摩離陝父等三人爲友 行至淹水 【一名盖斯水 在今鴨東北】 欲渡無梁 恐爲追兵所迫 告水曰 我是天帝子 河伯外孫 今 日逃走 追者垂及如何 於是 魚鼈浮出成橋 朱蒙得渡 魚鼈乃解 追騎不得渡 朱蒙行至毛屯谷 【魏書云 至普述水】 遇三人 其一人着麻衣 一人着衲衣 一人着水藻衣 朱蒙問曰 子等何許人也 何姓何名乎 麻衣者曰 名再思 衲衣者曰 名武骨 水藻衣者曰 名默居 而不言姓 朱蒙賜再思姓克氏 武骨仲室 氏 默居少室氏 乃告於衆曰 我方承景命 欲啓元基 而適遇此三賢 豈非天賜乎 遂揆其能 各任以事 與之俱至卒本川 【魏書云 至升骨城】 觀其土壤肥 美 山河險固 遂欲都焉 而未遑作宮室 但結廬於沸流水上居之 國號高句麗 因以高爲氏 【一云 朱蒙至卒本扶餘 王無子 見朱蒙知非常人 以其女妻之 王薨 朱蒙嗣位】 時朱蒙年二十二歲 是漢孝元帝建昭二年 新羅始祖赫居世二十一年甲申歲也 四方聞之 來附者衆 其地連靺鞨部落 恐侵盜爲害 遂攘斥之 靺鞨畏服 不敢犯焉 王見沸流水中 有菜葉逐流下 知有人

在上流者 因以獵往尋 至沸流國 其國王松讓出見曰 寡人僻在海隅 未嘗得見君子 今邂逅相遇 不亦幸乎 然不識吾子自何而來 答曰 我是天帝子 來都於某所 松讓曰 我累世爲王 地小不足容兩主 君立都日淺 爲我附庸可乎 王忿其言 因與之鬪 辯亦相射以校藝 松讓不能抗

三国史記百濟温祚王紀

百濟始祖 温祚王 其父鄒牟 或云朱蒙 自北扶餘逃難 至卒本扶餘 扶餘王無子 只有三女子 見朱蒙 知非常人 以第二女妻之 未幾 扶餘王薨 朱蒙嗣位 生二子 長曰沸流 次曰温祚 【或云 朱蒙到卒本 娶越郡女 生二子】 及朱蒙在北扶餘所生子來爲太子 沸流·温祚 恐爲太子所不容 遂與烏干·馬黎等十臣南行 百姓從之者多 遂至漢山 登負兒嶽 望可居之地 沸流欲居於海濱 十臣諫曰 惟此河南之地 北帶漢水 東據高岳 南望沃澤 西阻大海 其天險地利 難得之勢 作都於斯 不亦宜乎 沸流不聽 分其民 歸彌鄒忽以居之 温祚都河南慰禮城 以十臣爲輔翼 國號十濟 是前漢成帝鴻嘉三年也 沸流以 彌鄒 土濕水鹹 不得安居 歸見慰禮 都邑鼎定 人民安泰 遂慙悔而死 其臣民皆歸於

慰禮 後以來時百姓樂從 改號百濟 其世系與高句麗 同出扶餘 故以扶餘爲氏 【一云 始祖沸流王 其父優台 北扶餘王解扶婁庶孫 母召西奴 卒本人延勃之女 始歸于優台 生子二人 長曰沸流 次曰温祚 優台死 寡居于卒 本 後朱蒙不容於扶餘 以前漢建昭二年 春二月 南奔至卒本 立都號高句麗 娶召西奴爲妃 其於開基創業 頗有內助 故朱蒙寵接之特 厚 待沸流等如己子 及朱蒙在扶餘所生禮氏子孺留來 立之爲太子 以至嗣位焉 於是 沸流謂弟温祚曰 始大王避扶餘之難 逃歸至此 我母氏傾家財 助成邦業 其勸勞多矣 及 大王厭世 國家屬於孺留 吾等徒在此 鬱鬱如疣贅 不如奉母氏 南遊卜地 別立國都 遂與弟率黨類 渡帶二水 至彌鄒忽以居之 北史及隋書皆云 東明之後 有仇台 篤於仁信 初立國于帶方故地 漢遼東太守公孫度以女妻之 遂爲東夷強國 未知孰是】

三国史記新羅赫居世居西干紀

始祖 姓朴氏 諱赫居世 前漢孝宣帝 五鳳元年甲子 四月丙辰一日正月十五日 卽位 號居西干 時年十三 國號徐那伐 先是 朝鮮遺民 分居山谷之間爲六村 一曰闕川楊山村 二曰突山高墟村 三曰 觜山珍支

村或云干珍村 四曰茂山大樹村 五曰金山加 利 村 六曰明活山高耶
村 是爲辰韓六部 高墟村長蘇伐公 望楊山麓 蘿井傍林間 有馬 而嘶
則往觀之 忽不見馬 只有大卵 剖之 有嬰兒出焉 則收而養之 及年
十餘歲 岐嶷然夙成 六部人 以其生神異 推尊之 至是立爲君焉 辰人
謂瓠爲朴 以初大卵如瓠 故以朴爲姓 居西干 辰言王或云呼貴人之稱

付録2 正史の高句麗条

後漢書

高句驪 在遼東之東韃淠/裏/裡 南與朝鮮 濊貊 東與沃沮 北與扶餘
接 地方二韃淠/裏/裡 多大山深穀 人隨而為居 少田業 力作不足以
自資 故其俗節于飲食 而好脩宮室 東夷相傳以為扶餘別/警種 故言
語法則多同 而跪拜拙一腳 行步皆走 凡有五族 有消奴部 絕奴部 順
奴部 灌奴部 桂婁部 本消奴部為王 稍微弱 後桂婁部代之 其置官
有相加 對盧 沛者 古鄒大加 主簿 優檯/臺/颱 使者 帛衣先人 武帝
滅朝鮮 以高句驪為縣 使屬玄菟 賜鼓吹伎人 其俗淫 皆潔淨/淨自熹
暮夜輒男女群聚為倡樂 好祠鬼神 社稷 零星 以十月祭天大會 名曰
“東盟” 其國東有大穴 號禊神 亦以十月迎而祭之 其公會衣服皆錦
繡 金銀以自飾 大加 主簿皆著幘 如冠幘而無後；其小加著摺風 形如
弁 無牢獄 有罪 諸加評議便殺之 沒入妻子為奴婢 其昏姻皆就婦傢
生子長大 然後將還 便稍營送終之具 金銀財幣儘/盡于厚葬 勸/積石
為封 亦種鬆柏 其人性兇急 有氣力 習戰鬥 好寇鈔 沃沮 東濊皆屬
焉 句驪一名貊 有別/警種 依小水為居 因名曰小水貊 齟好弓 所謂
“貊弓”是也

王莽初 發/髮句驪兵以伐匈奴 其人不欲行 強/彊迫遣之 皆亡薊塞為寇盜 遼西大尹田譚追擊 戰死 莽令其將嚴尤擊之 誘句驪侯騶入塞 斬之 傳首長安 莽大說 更名高句驪王為下句驪侯 于是貊人寇邊愈甚 建武八年 高句驪遣使朝貢 光武復/複其王號 二十三年 句驪蠶支落大加戴升等萬餘口詣樂浪內屬 二十五年春 句驪寇右北平 漁陽/陽上穀 太原 而遼東太守祭彤以恩信招之 皆復/複款塞 后句驪王宮生而開目能視 國人懷之 及長勇壯 數犯邊境 和帝元興元年春 復/複入遼東 寇略六縣 太守耿夔擊破之 斬其渠帥 安帝永初五年 宮遣使貢獻 求屬玄菟 元初五年 復/複與濊貊寇玄菟 攻華麗城 建光元年春 幽州刺史馮煥 玄菟太守姚光 遼東太守蔡諷等 將兵薊塞 擊之 捕斬濊貊渠帥 獲/穫兵馬財物 宮迺遣嗣子遂成將二韃餘人逆光等 遣使詐降；光等信之 遂成因據險阨以遮大軍 而潛遣三韃人攻玄菟 遼東 焚城郭 殺傷二韃餘人 于是發/髮廣陽/陽 漁陽/陽 右北平 涿郡屬國三韃餘騎同救之 而貊人已去 夏 復/複與遼東鮮卑八韃餘人攻遼隊 殺略吏人 蔡諷等追擊于新昌 戰歿 功曹耿耗 兵曹掾龍崇 兵馬掾公孫酺以身捍諷 俱歿于陣 死者百餘人 鞞 宮遂率馬韓 濊貊數韃騎圍玄菟 伏餘王遣子尉仇檣/臺/颯將二萬餘人 與州郡並/併力討破之 斬首五百餘級 是歲宮死 子遂成立 姚光上言欲因其喪發/髮兵擊之 議者皆以為可許

尚書陳忠曰：“宮前桀黠 光不能討 死而擊之 非義也 宜遣弔問 因責讓前罪 赦不加誅 取其後善 ” 安帝從之 明年 遂成還漢生口 詣玄菟降 詔曰：“遂成等桀逆無狀 當/噹/當斬斷 DI 73 醢 以示百姓 倖會赦令 乞罪請降 鮮卑 濊貊連年寇鈔 驅略小民 動以韃數 而裁送數十百人 非嚮化之心也 自今已後 不與縣官戰鬥而自以親附送生口者 皆與贖直 縑人四十匹 小口半之 ” 遂成死 子伯固立 其後濊貊率服 東垂少事 順帝暘/陽嘉元年 置玄菟郡屯田六部 質 桓之間 復/複犯遼東 西安平 殺帶方令 掠得樂浪太守妻子 建寧二年 玄菟太守耿臨討之 斬首數百級 伯固降服 乞屬玄菟雲

三国志

高句麗在遼東之東千里 南與朝鮮 濊貊 東與沃沮 北與夫餘接 都於丸都之下 方可二千里 戶三萬 多大山深谷 無原澤 隨山谷以爲居 食澗水 無良田 雖力佃作 不足以實口腹 其俗節食 好治宮室 於所居之左右立大屋 祭鬼神 又祀靈星 社稷 其人性凶急 善寇鈔 其國有王 其官有相加 對 盧 沛者 古雛加 主簿 優台丞 使者 阜衣先人 尊卑各有等級 東夷舊語以爲夫餘別種 言語諸事 多與夫餘同 其性氣衣服

有異 本有五族 有涓奴部 絕 奴部 順奴部 灌奴部 桂婁部 本涓奴部
爲王 稍微弱 今桂婁部代之 漢時賜鼓吹技人 常從玄菟郡受朝服衣幘
高句麗令主其名籍 後稍驕恣 不復詣郡 於 東界築小城 置朝服衣幘
其中 歲時來取之 今胡猶名此城爲幘溝淩 溝淩者 句麗名城也 其置
官 有對盧則不置沛者 有沛者則不置對盧 王之宗族 其大加皆 稱古
雛加 涓奴部本國主 今雖不爲王 適統大人 得稱古雛加 亦得立宗廟
祠靈星 社稷 絕奴部世與王婚 加古雛之號 諸大加亦自置使者 阜衣
先人 名皆 達於王 如卿大夫之家臣 會同坐起 不得與王家使者 阜衣
先人同列 其國中大家不佃作 坐食者萬餘口 下戶遠擔米糧魚鹽供給
之 其民喜歌舞 國中邑落 暮 夜男女群聚 相就歌戲 無大倉庫 家家
自有小倉 名之爲桴京 其人絜清自喜 喜藏釀 跪拜申一腳 與夫餘異
行步皆走 以十月祭天 國中大會 名曰東盟 其公會 衣服皆錦繡金銀
以自飾 大加主簿頭著幘 如幘而無餘 其小加著折風 形如弁 其國東
有大穴 名隧穴 十月國中大會 迎隧神還于國東上祭之 置木隧 於神
坐 無牢獄 有罪諸加評議 便殺之 沒入妻子爲奴婢 其俗作婚姻 言語
已定 女家作小屋於大屋後 名婿屋 婿暮至女家戶外 自名跪拜 乞得
就女宿 如 是者再三 女父母乃聽使就小屋中宿 傍頓錢帛 至生子已
長大 乃將婦歸家 其俗淫 男女已嫁娶 便稍作送終之衣 厚葬 金銀財
幣 盡於送死 積石爲封 列 種松柏 其馬皆小 便登山 國人有氣力 習

戰鬥 沃沮 東濊皆屬焉 又有小水貊 句麗作國 依大水而居 西安平縣北有小水 南流入海 句麗別種依小水作 國 因名之爲小水貊 出好弓 所謂貊弓是也

王莽初發高句麗兵以伐胡 不欲行 強迫遣之 皆亡出塞爲寇盜 遼西大尹田譚追擊之 爲所殺 州郡縣歸咎于句麗侯駒 嚴尤奏言：「貊人犯法 罪不 起於駒 且宜安慰 今猥被之大罪 恐其遂反 」莽不聽 詔尤擊之 尤誘期句麗侯駒至而斬之 傳送其首詣長安 莽大悅 佈告天下 更名高句麗爲下句麗 當此 時爲侯國 漢光武帝八年 高句麗王遣使朝貢 始見稱王

至殤 安之間 句麗王宮數寇遼東 更屬玄菟 遼東太守蔡風 玄菟太守姚光以宮爲二郡害 興師伐之 宮詐降請和 二郡不進 宮密遣軍攻玄菟 焚燒候城 入遼隧 殺吏民 後宮復犯遼東 蔡風輕將吏士追討之 軍敗沒

宮死 子伯固立 順 桓之間 復犯遼東 寇新安 居鄉 又攻西安平 於道上殺帶方令 略得樂浪太守妻子 靈帝建寧二年 玄菟太守耿臨討之 斬首虜數百級 伯固降 屬遼東 (嘉) 平中 伯固乞屬玄菟 公孫度之雄海東也 伯固遣大加優居 主簿然人等助度擊富山賊 破之

伯固死 有二子 長子拔奇 小子伊夷模 拔奇不肖 國人便共立伊夷模爲王 自伯固時 數寇遼東 又受亡胡五百餘家 建安中 公孫康出軍擊

之 破 其國 焚燒邑落 拔奇怨爲兄而不得立 與涓奴加各將下戶三萬
餘口詣康降 還住沸流水 降胡亦叛伊夷模 伊夷模更作新國 今日所在
是也 拔奇遂往遼東 有子 留句麗國 今古雛加駁位居是也 其後復擊
玄菟 玄菟與遼東合擊 大破之

伊夷模無子 淫灌奴部 生子名位宮 伊夷模死 立以爲王 今句麗王宮
是也 其曾祖名宮 生能開目視 其國人惡之 及長大 果凶虐 數寇鈔
國見 殘破 今王生墮地 亦能開目視人 句麗呼相似爲位 似其祖 故名
之爲位宮 位宮有力勇 便鞍馬 善獵射 景初二年 太尉司馬王率衆討
公孫淵 宮遣主簿大加 將數千人助軍 正始三年 宮寇西安平 其五年
爲幽州刺史毌丘儉所破 語在儉傳

宋書

東夷高句驪國 今治漢之遼東郡 高句驪王高璉 晉安帝義熙九年 遣長
史高翼奉表獻赭白馬 以璉爲使持節 都督營州諸軍事 征東將軍 高句
驪王 樂浪 公 高祖踐阼 詔曰：「使持節 都督營州諸軍事 征東將軍
高句驪王 樂浪公璉 使持節 督百濟諸軍事 鎮東將軍 百濟王映 並執
義海外 遠修貢職 惟新 告始 宜荷國休 璉可征東大將軍 映可鎮東大

將軍 持節 都督 王 公如故 」三年 加璉散騎常侍 增督平州諸軍事
少帝景平二年 璉遣長史馬婁等詣闕獻 方物 遣使慰勞之 曰：「皇帝問
使持節 散騎常侍 都督營平二州諸軍事 征東大將軍 高句驪王 樂浪
公 纂戎東服 庸績繼軌 厥惠既彰 款誠亦著 踰遼越 海 納貢本朝 朕
以不德 忝承鴻緒 永懷先蹤 思覃遺澤 今遣謁者朱邵伯 副謁者王邵
子等 宣旨慰勞 其茂康惠政 永隆厥功 式昭往命 稱朕意焉 」

先是 鮮卑慕容寶治中山 為索虜所破 東走黃龍 義熙初 寶弟熙為其
下馮跋所殺 跋自立為主 自號燕王 以其治黃龍城 故謂之黃龍國 跋
死 子弘立 [11]屢 為索虜所攻 不能下 太祖世 每歲遣使獻方物 元
嘉十二年 賜加除授 十五年 復為索虜所攻 弘敗走 奔高驪北豐城 表
求迎接 太祖遣使王白駒 趙次興迎 之 并令高驪料理資遣 璉不欲使
弘南 乃遣將孫漱 高仇等襲殺之 白駒等率所領七千餘人掩討漱等 生
禽漱 殺高仇等二人 璉以白駒等專殺 遣使執送之 上 以遠國 不欲違
其意 白駒等下獄 見原

璉每歲遣使 十六年 太祖欲北討 詔璉送馬 璉獻馬八百匹 世祖孝建
二年 璉遣長史董騰奉表慰國哀再周 并獻方物 大明三年 又獻肅慎氏
楛矢石磐 七年 詔曰：「使持節 散騎常侍 督平營二州諸軍事 征東大
將軍 高句驪王 樂浪公璉 世事忠義 作藩海外 誠係本朝 志剪殘險
通譯沙表 克宣王猷 宜 加褒進 以旌純節 可車騎大將軍 開府儀同三

司 持節 常侍 都督 王 公如故 」太宗泰始 後廢帝元徽中 貢獻不絕

南齊書

東夷高麗國 西與魏虜接界 宋末 高麗王樂浪公高璉爲使持節 散騎常侍 都督營平二州諸軍事 車騎大將軍 開府儀同三司 太祖建元元年 進號驃騎大將軍 三年 遣使貢獻 乘船泛海 使驛常通 亦使魏虜 然疆盛不受制

虜置諸國使邸 齊使第一 高麗次之 永明七年 平南參軍顏幼明 冗從僕射劉思敦使虜 虜元會 與高麗使相次 幼明謂僞主客郎裴叔令曰：

「我等銜 命上華 來造卿國 所爲抗敵 在乎一魏 自餘外夷 理不得望我鑣塵 況東夷小貊 臣屬朝廷 今日乃敢與我躡踵 」思敦謂僞南部尚書李思沖曰：「我聖朝處魏 使 未嘗與小國列 卿亦應知 」思沖曰：「實如此 但主副不得升殿耳 此間坐起甚高 足以相報 」思敦曰：「李道固昔使 正以衣冠致隔耳 魏國必纓冕而 至 豈容見黜 」幼明又謂虜主曰：「二國相亞 唯齊與魏 邊境小狄 敢躡臣蹤！」

高麗俗服窮袴 冠折風一梁 謂之幘 知讀《五經》 使人在京師 中書郎王融戲之曰：「服之不衷 身之災也 頭上定是何物？」答曰：「此卽古弁

之遺像也」

高璉年百餘歲卒 隆昌元年 以高麗王樂浪公高雲爲使持節 散騎常侍
都督營平二州諸軍事 征東大將軍 高麗王 樂浪公 建武三年 原闕
報功勞勤 實存名烈 假行寧朔將軍臣姐瑾等四人 振竭忠效 攘除國難
志勇果毅 等威名將 可謂扞城 固蕃社稷 論功料勤 宜在甄顯 今依例
輒假行 職 伏願恩潛 聽除所假 寧朔將軍 面中王姐瑾 曆贊時務 武
功竝列 今假行冠軍將軍 都將軍 都漢王 建威將軍 八中侯餘古 弱冠
輔佐 忠效夙著 今假 行寧朔將軍 阿錯王 建威將軍餘曆 忠款有素
文武烈顯 今假行龍驤將軍 邁盧王 廣武將軍餘固 忠效時務 光宣國
政 今假行建威將軍 弗斯侯」

梁書

高句驪者 其先出自東明 東明本北夷橐離王之子 離王出行 其侍兒於
後任娠 離王還 欲殺之 侍兒曰：「前見天上有氣如大雞子 來降我 因
以有 娠」王囚之 後遂生男 王置之豕牢 豕以口氣噓之 不死 王以爲
神 乃聽收養 長而善射 王忌其猛 復欲殺之 東明乃奔走 南至淹滯水
以弓擊水 魚鱉 皆浮爲橋 東明乘之得渡 至夫餘而王焉 其後支別爲

句驪種也 其國 漢之玄菟郡也 在遼東之東 去遼東千里 漢 魏世 南與朝鮮 穢貊 東與沃沮 北與夫餘接 漢武帝元封四年 滅朝鮮 置玄菟郡 以高句驪爲縣以屬之

句驪地方可二千里 中有遼山 遼水所出 其王都於丸都之下 多大山深谷 無原澤 百姓依之以居 食澗水 雖土著 無良田 故其俗節食 好治宮室 于所居之左立大屋 祭鬼神 又祠零星 社稷 人性凶急 喜寇抄 其官 有相加 對盧 沛者 古鄒加 主簿 優臺 使者 阜衣先人 尊卑各有等級 言語 諸事 多與夫餘同 其性氣 衣服有異 本有五族 有消奴部 絕奴部 慎奴部 藿奴部 桂婁部 本消奴部爲王 微弱 桂婁部代之 漢時賜衣幘 朝服 鼓吹 常從玄菟郡受之 後稍驕 不復詣郡 但於東界築小城以受之 至今猶名此城爲幘溝婁 「溝婁」者 句驪名「城」也 其置官 有對盧則不置沛者 有沛者則不置 對盧 其俗喜歌舞 國中邑落男女 每夜羣聚歌戲 其人潔清自喜 善藏釀 跪拜申一腳 行步皆走 以十月祭天大會 名曰「東明」 其公會衣服 皆錦繡金銀以自飾 大加主簿頭所著似幘而無後；其小加著折風 形如弁 其國無牢獄 有罪者則會諸加評議殺之 沒入妻子 其俗好淫 男女多相奔誘 已嫁娶 便稍作送 終之衣 其死葬 有槨無棺 好厚葬 金銀財幣盡於送死 積石爲封 列植松柏 兄死妻嫂 其馬皆小 便登山 國人尚氣力 便弓矢刀矛 有鎧甲 習戰鬪 沃沮 東穢皆屬焉

王莽初 發高驪兵以伐胡 不欲行 強迫遣之 皆亡出塞爲寇盜 州郡歸咎於句驪侯騶 嚴尤誘而斬之 王莽大悅 更名高句驪爲下句驪 當此時爲侯 矣 光武八年 高句驪王遣使朝貢 始稱王 至殤 安之間 其王名宮 數寇遼東 玄菟太守蔡風討之不能禁 宮死 子伯固立 順 和之間復數犯遼東寇抄 靈 帝建寧二年 玄菟太守耿臨討之 斬首虜數百級 伯固乃降屬遼東 公孫度之雄海東也 伯固與之通好 伯固死 子伊夷摸立 伊夷摸自伯固時已數寇遼東 又受亡 胡五百餘戶 建安中 公孫康出軍擊之 破其國 焚燒邑落 降胡亦叛伊夷摸 伊夷摸更作新國 其後伊夷摸復擊玄菟 玄菟與遼東合擊 大破之

伊夷摸死 子位宮立 位宮有勇力 便鞍馬 善射獵 魏景初二年 遣太傅司馬宣王率衆討公孫淵 位宮遣主簿 大加將兵千人助軍 正始三年 位宮寇 西安 嘉平 五年 幽州刺史母丘儉將萬人出玄菟討位宮 位宮將步騎二萬人逆軍 大戰於沸流 位宮敗走 儉軍追至峴 懸車束馬 登丸都山 屠其所都 斬首虜 萬餘級 位宮單將妻息遠竄 六年 儉復討之位宮輕將諸加奔沃沮 儉使將軍王頎追之 絕沃沮千餘里 到肅慎南界 刻石紀功；又到丸都山 銘不耐城而還 其 後 復通中夏

晉永嘉亂 鮮卑慕容廆據昌黎大棘城 元帝授平州刺史 句驪王乙弗利頻寇遼東 廆不能制 弗利死 子釗代立 康帝建元元年 慕容廆子晃率兵伐之 釗與戰 大敗 單馬奔走 晃乘勝追至丸都 焚其宮室 掠男子

五萬餘口以歸 孝武太元十年 句驪攻遼東 玄菟郡 後燕慕容垂遣弟農
伐句驪 復二郡 垂死 子 寶立 以句驪王安爲平州牧 封遼東 帶方二
國王 安始置長史 司馬 參軍官 後略有遼東郡 至孫高璉 晉安帝義熙
中 始奉表通貢職 歷宋 齊並授爵位 年 百餘歲死 子雲 齊隆昌中 以
爲使持節 散騎常侍 都督營 平二州 征東大將軍 樂浪公 高祖卽位
進雲車騎大將軍 天監七年 詔曰：「高驪王樂浪郡公 雲 乃誠款著 貢
驛相尋 宜隆秩命 式弘朝典 可撫東大將軍 開府儀同三司 持節 常侍
都督 王並如故 」十一年 十五年 累遣使貢獻 十七年 雲死 子安立
普通元年 詔安纂襲封爵 持節 督營 平二州諸軍事 寧東將軍 七年
安卒 子延立 遣使貢獻 詔以延襲爵 中大通四年 六年 大同元年 七
年 累奉表獻方物 太清二年 延卒 詔以其子襲延爵位

魏書

高句麗者 出於夫餘 自言先祖朱蒙 朱蒙母河伯女 爲夫餘王閉於室中
爲日所照 引身避之 日影又逐 既而有孕 生一卵 大如五升 夫餘王棄
之與 犬 犬不食；棄之與豕 豕又不食；棄之於路 牛馬避之；後棄之野
眾鳥以毛茹之 夫餘王割剖之 不能破 遂還其母 其母以物裹之 置於

暖處 有一男破殼而 出 及其長也 字之曰朱蒙 其俗言「朱蒙」者 善射也 夫餘人以朱蒙非人所生 將有異志 請除之 王不聽 命之養馬 朱蒙每私試 知有善惡 駿者減食令 瘦 駑者善養令肥 夫餘王以肥者自乘 以瘦者給朱蒙 後狩于田 以朱蒙善射 限之一矢 朱蒙雖矢少 殪獸甚多 夫餘之臣又謀殺之 朱蒙母陰知 告朱蒙曰：「國將害汝 以汝才略 宜遠適四方」 朱蒙乃與烏引 烏違等二人 棄夫餘 東南走 中道遇一大水 欲濟無梁 夫餘人追之甚急 朱蒙告水曰：「我是日子 河 伯外孫 今日逃走 追兵垂及 如何得濟？」於是魚鼈並浮 為之成橋 朱蒙得渡 魚鼈乃解 追騎不得渡 朱蒙遂至普述水 遇見三人 其一人著麻衣 一人著納 衣 一人著水藻衣 與朱蒙至紇升骨城 遂居焉 號曰高句麗 因以為氏焉

初 朱蒙在夫餘時 妻懷孕 朱蒙逃後生一子 字始閭諧 及長 知朱蒙為國主 即與母亡而歸之 名之曰閭達 委之國事 朱蒙死 閭達代立 閭達死 子 如栗代立 如栗死 子莫來代立 乃征夫餘 夫餘大敗 遂統屬焉 莫來子孫相傳 至裔孫宮 生而開目能視 國人惡之 及長凶虐 國以殘破 宮曾孫位宮亦生而 視 人以其似曾祖宮 故名為位宮 高句麗呼相似為「位」 位宮亦有勇力 便弓馬 魏正始中 入寇遼西安平 [1]為 幽州刺史毋丘儉所破 其玄孫乙弗利 利子釗 烈帝時與慕容氏相攻擊 建國四年 慕容元真率眾伐之 入自南陝 戰於木底 大破釗軍 乘勝長驅

遂入丸都 釗 單馬奔竄 元真掘釗父墓 載其屍 并掠其母妻 珍寶 男女五萬餘口 焚其宮室 毀丸都城而還 自後釗遣使來朝 阻隔寇讎 不能自達 釗後為百濟所殺

世祖時 釗曾孫璉始遣使者安東奉表貢方物 并請國諱 世祖嘉其誠款 詔下帝系名諱於其國 遣員外散騎侍郎李敖拜璉為都督遼海諸軍事 征東將軍 領護 東夷中郎將 遼東郡開國公 高句麗王 敖至其所居平壤城 訪其方事 云：遼東南一千餘里 東至柵城 南至小海 北至舊夫餘 民戶參倍於前 魏時 其地東西 二千里 南北一千餘里 民皆土著 隨山谷而居 衣布帛及皮 土田薄瘠 蠶農不足以自供 故其人節飲食 其俗淫 好歌舞 夜則男女羣聚而戲 無貴賤之節 然 潔淨自喜 其王好治宮室 其官名有謁奢 太奢 大兄 小兄之號 頭著折風 其形如弁 旁插鳥羽 貴賤有差 立則反拱 跪拜曳一脚 行步如走 常以十月祭 天 國中大會 其公會 衣服皆錦繡 金銀以為飾 好蹲踞 食用俎几 出三尺馬 云本朱蒙所乘 馬種即果下也 後貢使相尋 歲致黃金二百斤 白銀四百斤

時馮文通率眾奔之 世祖遣散騎常侍封撥詔璉令送文通 璉上書稱當與文通俱奉王化 竟不送 世祖怒 欲往討之 樂平王丕等議待後舉 世祖乃止 而文通亦尋為璉所殺

後文明太后以顯祖六宮未備 敕璉令薦其女 璉奉表 云女已出嫁 求以

弟女應旨 朝廷許焉 乃遣安樂王真 尚書李敷等至境送幣 璉惑其左右之說 云朝廷昔與馮氏婚姻 未幾而滅其國 殷鑒不遠 宜以方便辭之 璉遂上書妄稱女死 朝廷疑其矯詐 又遣假散騎常侍程駿切責之 若女審死者 聽更選宗淑 璉云：「若天子恕其前愆 謹當奉詔」 會顯祖崩 乃止

至高祖時 璉貢獻倍前 其報賜亦稍加焉 時光州於海中得璉所遣詣蕭道成使餘奴等送闕 高祖詔責璉曰：「道成親殺其君 竊號江左 朕方欲興滅國於舊 邦 繼絕世於劉氏 而卿越境外交 遠通篡賊 豈是藩臣守節之義！今不以一過掩卿舊款 即送還藩 其感恕思愆 祇承明憲 輯寧所部 動靜以聞」

太和十五年 璉死 年百餘歲 高祖舉哀於東郊 遣謁者僕射李安上策贈車騎大將軍 太傅 遼東郡開國公 高句麗王 諡曰康 又遣大鴻臚拜璉孫雲使持節 都督遼海諸軍事 征東將軍 領護東夷中郎將 遼東郡開國公 高句麗王 賜衣冠服物車旗之飾 又詔雲遣世子入朝 令及郊丘之禮 雲上書辭疾 惟遣其從叔 升于隨使詣闕 嚴責之 自此歲常貢獻 正始中 世宗於東堂引見其使芮悉弗 [2]悉弗進曰：「高麗係誠天極 累葉純誠 地產土毛 無愆王貢 但黃金出自夫餘 珂則涉羅所產 今夫餘為勿吉所逐 涉羅為百濟所并 國王臣雲惟繼絕之義 悉遷于境內 二品所以不登王府 實兩賊是為」 世宗曰：「高麗世荷上將 專制海外 九

夷黠虜 實得征之 瓶罄罍耻 誰之咎也？昔方貢之愆 責在連率 卿宜宣朕旨 於卿主 務盡威懷之略 揃披害羣 輯寧東裔 使二邑還復舊墟 土毛無失常貢也 」

神龜中 雲死 靈太后為舉哀於東堂 遣使策贈車騎大將軍 領護東夷校尉 遼東郡開國公 高句麗王 又拜其世子安為安東將軍 領護東夷校尉 遼東郡開 國公 高句麗王 正光初 光州又於海中執得蕭衍所授安寧東將軍衣冠劍佩 及使人江法盛等 送於京師 安死 子延立 出帝初 詔加延使持節 散騎常侍 車騎 大將軍 領護東夷校尉 遼東郡開國公 高句麗王 賜衣冠服物車旗之飾 天平中 詔加延侍中 驃騎大將軍 餘悉如故 延死 子成立 訖於武定末 其貢使無歲 不至

周書

高麗者 其先出於夫餘 自言始祖曰朱蒙 河伯女感日影所孕也 朱蒙長而有材畧 夫餘人惡而逐之 土于紇斗骨城 自號曰高句麗 仍以高為氏 其孫莫來漸盛 擊夫餘而臣之 莫來裔孫璉 始通使於後魏 其地 東至新羅 西渡遼水二千里 南接百濟 北鄰靺鞨千餘里 治平壤城 其城 東西六里 南臨湞水 城內唯積倉儲器備 寇賊至日 方入固守

王則別為宅於其側 不常居之 其外有國內城及漢城 亦別都也 復有遼東 玄菟等數十城 皆置官司 以相統攝

大官有大對盧 次有太大兄 大兄 小兄 意俟奢 烏拙 太大使者 大使者 小使者 褥奢 翳屬 仙人并褥薩凡十三等 分掌內外事焉 其大對盧則以疆弱相陵 奪而自為之 不由王之署置也 其刑法：謀反及叛者 先以火焚爇 然後斬首 籍沒其家 盜者 十餘倍徵贓 若貧不能備 及負公私債者 皆聽評 其子女為奴婢以償之

丈夫衣同袖衫 大口褲 白韋帶 黃革履 其冠曰骨蘇 多以紫羅為之 雜以金銀為飾 其有官品者 又插二鳥羽於其上 以顯異之 婦人服裙襦 裾袖 皆為袂 書籍有《五經》 《三史》 《三國志》 《晉陽秋》 兵器有甲弩弓箭戟稍矛鋌 賦稅則絹布及粟 隨其所有 量貧富差等輸之 土田瘠薄 居處節儉 然尚容止 多詐偽 言辭鄙穢 不簡親疏 乃至同川而浴 共室而寢 風俗好淫 不以為愧 有游女者 夫無常人 婚娶之禮 畧無財幣 若受財者 謂之賣婢 俗 甚恥之 父母及夫喪 其服制同於華夏 兄弟則限以三月 敬信佛法 尤好淫祀 又有神廟二所：一曰夫餘神 刻木作婦人之象；一曰登高神 云是其始祖夫餘神之 子 竝置官司 遣人守護 蓋河伯女與朱蒙云

璉五世孫成 大統十二年 遣使獻其方物 成死 子湯立 建德六年 湯又遣使來貢 高祖拜湯為上開府儀同大將軍 遼東郡開國公 遼東王

隋書

高麗之先 出自夫餘 夫余王嘗得河伯女 因閉於室內 爲日光隨而照之感而遂孕 生一大卵 有一男子破殼而出 名曰硃蒙 夫余之臣以硃蒙非人所生 鹹請殺之 王不聽 及壯 因從獵 所獲居多 又請殺之 其母以告硃蒙 硃蒙棄夫余東南走 遇一大水 深不可越 硃蒙曰：「我是河伯外孫 日之子也 今有難 而追兵且及 如何得渡？」於是魚鱉積而成橋 硃蒙遂渡 追騎不得濟而還 硃蒙建國 自號高句麗 以高爲氏 硃蒙死 子閻達嗣 至其孫莫來興兵 遂並 夫餘 至裔孫位宮 以魏正始中入寇 西安平 毋丘儉拒破之 位宮玄孫之子曰昭列帝 爲慕容氏所破 遂入丸都 焚其宮室 大掠而還 昭列帝后爲百濟所殺 其曾 孫璉 遣使後魏 璉六世孫湯 在周遣使朝貢 武帝拜湯上開府 遼東郡公 遼東王 高祖受禪 湯復遣使詣闕 進授大將軍 改封高麗王 歲遣使朝貢不絕 其國東西二千里 南北千餘里 都於平壤城 亦曰長安城 東西六里 隨山屈曲 南臨淇水 復有國內城 漢城 並其都會之所 其國中呼爲「三京」 與新羅每相侵奪 戰爭不息 官有太大兄 次大兄 次小兄 次對盧 次意侯奢 次烏拙 次太大使者 次大使者 次小使者 次禱奢 次翳屬 次仙

人 凡十二 等 復有內評 外評 五部褥薩 人皆皮冠 使人加插鳥羽 貴者冠用紫羅 飾以金銀 服大袖衫 大口袴 素皮帶 黃革屨 婦人裙襦加襪 兵器與中國略同 每 春秋校獵 王親臨之 人稅布五匹 谷五石 遊人則三年一稅 十人共細布一匹 租戶一石 次七鬥 下五鬥 反逆者縛之於柱 爇而斬之 籍沒其家 盜則償十 倍 用刑既峻 罕有犯者 樂有五弦 琴 箏 篳篥 橫吹 簫 鼓之屬 吹蘆以和曲 每年初 聚戲于淇水之上 王乘腰輿 列羽儀以觀之 事畢 王以衣服入 水 分左右爲二部 以水石相濺擲 喧呼馳逐 再三而止 俗好蹲踞 潔淨自喜 以趨走爲敬 拜則曳一腳 立各反拱 行必搖手 性多詭伏 父子同川而浴 共室 而寢 婦人淫奔 俗多遊女 有婚嫁者 取男女相悅 然即爲之 男家送豬酒而已 無財聘之禮 或有受財者 人共恥之 死者殯于屋內 經三年 擇吉日而葬 居 父母及夫之喪 服皆三年 兄弟三月 初終哭泣 葬則鼓舞作樂以送之 埋訖 悉取死者生時服玩車馬置於墓側 會葬者爭取而去 敬鬼神 多淫祠

開皇初 頻有使入朝 及平陳之後 湯大懼 治兵積穀 爲守拒之策 十七年 上賜湯璽書曰：

朕受天命 愛育率土 委王海隅 宣揚朝化 欲使圓首方足 各遂其心 王每遣使人 歲常朝貢 雖稱藩附 誠節未盡 王既人臣 須同朕德 而乃驅逼 鞅鞅 固禁契丹 諸藩頓顙 爲我臣妾 忿善人之慕義 何毒害之情深

乎？太府工人 其數不少 王必須之 自可聞奏 昔年潛行財貨 利動小人 私將弩手 逃竄 下國 豈非修理兵器 意欲不臧 恐有外聞 故爲盜竊？時命使者 撫尉王籓 本欲問彼人情 教彼政術 王乃坐之空館 嚴加防守 使其閉目塞耳 永無聞見 有 何陰惡 弗欲人知 禁制官司 畏其訪察？又數遣馬騎 殺害邊人 屢馳奸謀 動作邪說 心在不賓 朕於蒼生 悉如赤子 賜王土宇 授王官爵 深恩殊澤 彰著 遐邇 王專懷不信 恆自猜疑 常遣使人 密覘消息 純臣之義 豈若是也？蓋當由朕訓導不明 王之愆違 一已寬恕 今日以後 必須改革 守籓臣之節 奉朝正之典 自化爾籓 勿忤他國 則長享富貴 實稱朕心 彼之一方 雖地狹人少 然普天之下 皆爲朕臣 今若黜王 不可虛置 終須更選官屬 就彼安撫 王若灑心 易行 率由憲章 即是朕之良臣 何勞別遣才彥也？昔帝王作法 仁信爲先 有善必賞 有惡必罰 四海之內 具聞朕旨 王若無罪 朕忽加兵 自余籓國 謂朕何 也！王必虛心 納朕此意 慎勿疑惑 更懷異圖 往者陳叔寶代在江陰 殘害人庶 驚動我烽候 抄掠我邊境 朕前後誠敕 經歷十年 彼則恃長江之外 聚一隅之衆 昏狂驕傲 不從朕言 故命將出師 除彼凶逆 來往不盈旬月 兵騎不過數千 歷代逋寇 一朝清蕩 遐邇乂安 人神胥悅 聞王歎恨 獨致悲傷 黜陟幽明 有司是職 罪王不爲陳滅 賞王不爲陳存 樂禍好亂 何爲爾也？王謂遼水之廣 何如長江？高麗之人 多少陳國？朕若不存含育 責王前愆 命一將軍 何

待多力！殷勤曉示 許王自新耳 宜得朕懷 自求多福

湯得書惶恐 將奉表陳謝 會病卒 子元嗣立 高祖使使拜元爲上開府儀同三司 襲爵遼東郡公 賜衣一襲 元奉表謝恩 並賀祥瑞 因請封王 高祖優冊元爲王

明年 元率靺鞨之衆萬餘騎寇遼西 營州總管韋衝擊走之 高祖聞而大怒 命漢王諒爲元帥 總水陸討之 下詔黜其爵位 時饋運不繼 六軍乏食 師出 臨渝關 復遇疾疫 王師不振 及次遼水 元亦惶懼 遣使謝罪 上表稱「遼東糞土臣元」云云 上於是罷兵 待之如初 元亦歲遣朝貢 煬帝嗣位 天下全盛 高昌王 突厥啟人可汗並親詣闕貢獻 於是征元入朝 元懼藩禮頗闕 大業七年 帝將討元之罪 車駕渡遼水 上營於遼東城 分道出師 各頓兵於其城下 高麗率兵 出拒 戰多不利 於是皆嬰城固守 帝令諸軍攻之 又敕諸將：「高麗若降者 即宜撫納 不得縱兵」 城將陷 賊輒言請降 諸將奉旨不敢赴機 先令馳奏 比報 至 賊守禦亦備 隨出拒戰 如此者再三 帝不悟 由是食盡師老 轉輸不繼 諸軍多敗績 於是班師 是行也 唯于遼水西拔賊武厲邏 置遼東郡及通定鎮而還 九年 帝復親征之 乃敕諸軍以便宜從事 諸將分道攻城 賊勢日蹙 會楊玄感作亂 反書至 帝大懼 即日六軍並還 兵部侍郎斛斯政亡入高麗 高麗具知事實 悉銳來追 殿軍多敗 十年 又發天下兵 會盜賊蜂起 人多流亡 所在阻絕 軍多失期 至遼水 高麗亦困弊 遣使乞降 囚送斛

斯政以贖罪 帝許之 頓於懷遠 鎮 受其降款 仍以俘囚軍實歸 至京師
以高麗使者親告于太廟 因拘留之 仍征元入朝 元竟不至 帝敕諸軍嚴
裝 更圖後舉 會天下大亂 遂不克復行

付録3 正史の百済条

宋書

百濟國 本與高驪俱在遼東之東千餘里 其後高驪略有遼東 百濟略有遼西 百濟所治 謂之晉平郡晉平縣

義熙十二年 以百濟王餘映為使持節 都督百濟諸軍事 鎮東將軍 百濟王 [12]高 祖踐阼 進號鎮東大將軍 少帝景平二年 映遣長史張威詣闕貢獻 元嘉二年 太祖詔之曰：「皇帝問使持節 都督百濟諸軍事 鎮東大將軍 百濟王 累葉忠順 越海効誠 遠王纂戎 聿修先業 慕義既彰 厥懷赤款 浮桴驪水 獻琛執贄 故嗣位方任 以藩東服 勉勗所莅 無墜前蹤 今遣兼謁者閻丘恩子 兼副謁者丁敬 子等宣旨慰勞稱朕意 」其後每歲遣使奉表 獻方物 七年 百濟王餘毗復修貢職 以映爵號授之 二十七年 毗上書獻方物 私假臺使馮野夫西河太守 表求易 林 式占 腰弩 太祖並與之 毗死 子慶代立 世祖大明元年 遣使求除授 詔許 二年 慶遣使上表曰：「臣國累葉 偏受殊恩 文武良輔 世蒙朝爵 行冠軍 將軍右賢王餘紀等十一人 忠勤宜在顯進 伏願垂愍 並聽賜除 」仍以行冠軍將軍右賢王餘紀為冠軍將軍 以行征虜將軍左賢王餘昆 行征虜將軍餘暈並為征虜將 軍 以行輔國將軍餘都 餘乂並為輔國將軍 以

行龍驤將軍沐衿 餘爵並為龍驤將軍 以行寧朔將軍餘流 麋貴並為寧朔將軍 以行建武將軍于西 餘婁並為建武將軍 太宗泰始七年 又遣使貢獻

南齊書

牟大又表曰：「臣所遣行建威將軍 廣陽太守 兼長史臣高達 行建威將軍 朝鮮太守 兼司馬臣楊茂 行宣威將軍 兼參軍臣會邁等三人 志行清亮 忠款夙著 往泰始中 比使宋朝 今任臣使 冒涉波險 尋其至效 宜在進爵 謹依先例 各假行職 且玄澤靈休 萬里所企 況親趾天庭 乃不蒙賴 伏願天監特 潛除正 達邊效夙著 勤勞公務 今假行龍驤將軍 帶方太守 茂志行清壹 公務不廢 今假行建威將軍 廣陵太守 邁執志周密 屢致勤效 今假行廣武將軍 清河太守」詔可 竝賜軍號 除太守為使持節 都督百濟諸軍事 鎮東大將軍 使兼竭者僕射孫副策命大襲亡祖父牟都為百濟王 曰：「於戲！惟爾世襲忠勤 誠 著遐表 滄路肅澄 要貢無替 式循彝典 用纂顯命 往欽哉！其敬膺休業 可不慎歟！制詔行都督百濟諸軍事 鎮東大將軍百濟王牟大今以大襲祖父牟都為百濟王 卽位章綬等玉銅虎竹符四 王其拜受 不亦休乎！」

是歲 魏虜又發騎數十萬攻百濟 入其界 牟大遣將沙法名 贊首流 解禮昆 木幹那率衆襲擊虜軍 大破之 建武二年 牟大遣使上表曰：「臣自昔受 封 世被朝榮 忝荷節鉞 克攘列辟 往姐瑾等竝蒙光除 臣庶咸泰 去庚午年 獫狁弗悛 舉兵深逼 臣遣沙法名等領軍逆討 宵襲霆擊 匈奴張惶 崩若海蕩 乘奔追斬 僵屍丹野 由是摧其銳氣 鯨暴韜凶 今邦宇謐靜 實名等之略；尋其功勳 宜在褒顯 今假沙法名行征虜將軍 邁羅王 贊首流爲行安國將軍 辟中 王 解禮昆爲行武威將軍 弗中侯 木幹那前有軍功 又拔臺舫 爲行廣威將軍 面中侯 伏願天恩特潛聽除」又表曰：「臣所遣行龍驤將軍 樂浪太守兼長史臣 慕遺 行建武將軍 城陽太守兼司馬臣王茂 兼參軍 行振武將軍 朝鮮太守臣張塞 行揚武將軍陳明 在官忘私 唯公是務 見危授命 蹈難弗顧 今任臣使 冒涉波險 盡其至誠 實宜進爵 各假行署 伏願聖朝特賜除正」詔可 竝賜軍號

梁書

百濟者 其先東夷有三韓國 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 弁韓 辰韓 各十二國 馬韓有五十四國 大國萬餘家 小國數千家 總十餘萬戶 百

濟卽 其一也 後漸強大 兼諸小國 其國本與句驪在遼東之東 晉世句驪既略有遼東 百濟亦據有遼西 晉平二郡地矣 自置百濟郡 晉太元中 王須；義熙中 王餘 映；宋元嘉中 王餘毗；並遣獻生口 餘毗死 立子慶 慶死 子牟都立 都死 立子牟太 齊永明中 除太都督百濟諸軍事 鎮東大將軍 百濟王 天監元年 進 太號征東將軍 尋爲高句驪所破 衰弱者累年 遷居南韓地 普通二年 王餘隆始復遣使奉表 稱「累破句驪 今始與通好」 而百濟更爲強國 其年 高祖詔曰：「行都督百濟諸軍事 鎮東大將軍 百濟王餘隆 守藩海外 遠脩貢職 乃誠款到 朕有嘉焉 宜率舊章 授茲榮命 可使持節 都督百濟諸軍事 寧東大將軍 百濟王」 五年 隆死 詔復以其子明爲持節 督百濟諸軍事 綏東將軍 百濟王 號所治城曰固麻 謂邑曰簷魯 如中國之言郡縣也

其國有二十二簷魯 皆以子弟宗族分據之 其人形長 衣服淨潔 其國近倭 頗有文身者 今言語服章略與高驪同 行不張拱 拜不申足則異 呼帽曰 冠 襦曰復衫 袴曰禪 其言參諸夏 亦秦 韓之遺俗云 中大通六年 大同七年 累遣使獻方物；并請《涅槃》等經義 《毛詩》博士 并工匠 畫師等 敕並給 之 太清三年 不知京師寇賊 猶遣使貢獻；既至 見城闕荒毀 並號慟涕泣 侯景怒 囚執之 及景平 方得還國

魏書

百濟國 其先出自夫餘 其國北去高句麗千餘里 處小海之南 其民土著地多下濕 率皆山居 有五穀 其衣服飲食與高句麗同

延興二年 其王餘慶始遣使上表曰：「臣建國東極 豺狼隔路 雖世承靈化 莫由奉藩 瞻望雲闕 馳情罔極 涼風微應 伏惟皇帝陛下協和天休 不勝係仰 之情 謹遣私署冠軍將軍 駙馬都尉弗斯侯 長史餘禮 龍驤將軍 帶方太守 司馬張茂等投舫波阻 搜徑玄津 託命自然之運 遣進萬一之誠 冀神祇垂感 皇靈 洪覆 克達天庭 宣暢臣志 雖旦聞夕沒 永無餘恨 」又云：「臣與高句麗源出夫餘 先世之時 篤崇舊款 其祖釗輕廢隣好 親率士眾 陵踐臣境 臣祖須整旅 電邁 應機馳擊 矢石暫交 梟斬釗首 自爾已來 莫敢南顧 自馮氏數終 餘燼奔竄 醜類漸盛 遂見陵逼 構怨連禍 三十餘載 財殫力竭 轉自孱蹶 若天慈 曲矜 遠及無外 速遣一將 來救臣國 當奉送鄙女 執掃後宮 并遣子弟 牧圉外廐 尺壤匹夫不敢自有 」又云：「今璉有罪 國自魚肉 大臣強族 戮殺無已 罪盈惡積 民庶崩離 是滅亡之期 假手之秋也 且馮族士馬 有鳥畜之戀；樂浪諸郡 懷首丘之心 天威一舉 有征無戰 臣雖不敏 志效畢力 當率所統 承風響應 且高麗不義 逆詐非一 外慕隗囂藩卑之辭 內懷兇禍豕突之行 或南通劉氏 或北約蠕蠕 共相脣齒 謀陵王略 昔唐堯

至聖 致罰丹水；孟常稱仁 不捨塗罍 涓流之水 宜早壅塞 今若不取 將貽後悔 去庚辰年後 臣西界小石山北國海中見屍十餘 并得衣器鞍 勒 視之非高麗之物 後聞乃是王人來降臣國 長蛇隔路 以沉于海 雖 未委當 深懷憤恚 昔宋戮申舟 楚莊徒跣；鷓撮放鳩 信陵不食 克敵建 名 美隆無已 夫以區區偏鄙 猶慕萬代之信 況陛下合氣天 地 勢傾山 海 豈令小豎 跨塞天遠 今上所得鞍一 以為實驗 」

顯祖以其僻遠 冒險朝獻 禮遇優厚 遣使者邵安與其使俱還 詔曰：「得 表聞之 無恙甚善 卿在東隅 處五服之外 不遠山海 歸誠魏闕 欣嘉至 意 用 戢于懷 朕承萬世之業 君臨四海 統御羣生 今宇內清一 八表 歸義 襁負而至者不可稱數 風俗之和 士馬之盛 皆餘禮等親所聞見 卿與高麗不穆 屢致陵 犯 苟能順義 守之以仁 亦何憂於寇讎也 前所 遣使 浮海以撫荒外之國 從來積年 往而不返 存亡達否 未能審悉 卿 所送鞍 比校舊乘 非中國之物 不可 以疑似之事 以生必然之過 經略 權要 已具別旨 」又詔曰：「知高麗阻強 侵軼卿土 修先君之舊怨 棄息 民之大德 兵交累載 難結荒邊 使兼申胥之誠 國 有楚越之急 乃應展 義扶微 乘機電舉 但以高麗稱藩先朝 供職日久 於彼雖有自昔之釁 於國未有犯令之愆 卿使命始通 便求致伐 尋討事會 理亦未周 故 往 年遣禮等至平壤 欲驗其由狀 然高麗奏請頻煩 辭理俱詣 行人不能抑 其請 司法無以成其責 故聽其所啟 詔禮等還 若今復違旨 則過咎益

露 後雖自陳 無所逃罪 然後與師討之 於義為得 九夷之國 世居海外 道暢則奉藩 惠戢則保境 故羈縻著於前典 楛貢曠於歲時 卿備陳強弱之形 具列往代之迹 俗殊事異 擬貺乖衷 洪規大略 其致猶在今中夏平一 宇內無虞 每欲陵威東極 懸旌域表 拯荒黎於偏方 舒皇風於遠服 良由高麗即敍 未及卜征 今若不從詔旨 則卿之來謀 載協朕意 元戎啟行 將不云遠 便可豫率同輿 具以待事 時遣報使 速究彼情 師舉之日 卿為鄉導之首 大捷之後 又受元功之賞 不亦善乎 所獻錦布海物雖不悉達 明卿至心 今賜雜物如別」又詔璉護送安等 安等至高句麗 璉稱昔與餘慶有讎 不令東過 安等於是皆還 乃下詔切責之 五年 使安等從東萊浮海 賜餘慶璽書 褒其誠節 安等至海濱 遇風飄蕩 竟不達而還

周書

百濟者 其先蓋馬韓之屬國 夫餘之別種 有仇台者 始國於帶方 故其地界東極新羅 北接高句麗 西南俱限大海 東西四百五十里 南北九百餘里 治固麻城 其外更有五方：中方曰古沙城 東方曰得安城 南方曰久知下城 西方曰刀先城 北方曰熊津城

王姓夫餘氏 號於羅瑕 民呼為韃吉支 夏言竝王也 妻號於陸 夏言妃也 官有十六品 左平五人 一品；達率三十人 二品；恩率三品；德率四品；扞率五品；柰率六品 六品已上 冠飾銀華 將德七品 紫帶；施德八品 皂帶；固德九品 赤帶；(李)〔季〕德十品 青帶；對德十一品 文督十二品 皆黃帶；武督十三品 佐軍十四品 振武十五品 克虞十六品 皆白帶 自恩率以下 官無常員 各有部司 分掌衆務 內官有前內部 穀部 肉部 內掠部 外掠部 馬部 刀部 功德部 藥部 木部 法部 後官部 外官有司軍部 司徒部 司空部 司寇部 點口部 客部 外舍部 綱部 日官部 都市部 都下有萬家 分為 五部 曰上部 前部 中部 下部 後部 統兵五百人 五方各有方領一人 以達率為之；郡將三人 以德率為之 方統兵一千二百人以下 七百人以上 城之內外 民庶及餘小城 咸分(肄)〔隸〕焉

其衣服 男子畧同於高麗 若朝拜祭祀 其冠兩廂加翅 戎事則不 拜謁之禮 以兩手據地為敬 婦人衣(以)〔似〕袍 而袖微大 在室者 編發盤於首 後垂一道為飾；出嫁者 乃分為兩道焉 兵有弓箭刀矛 俗重騎射 兼愛墳史 其秀異者 頗解屬文 又解陰陽五行 用宋《元嘉曆》 以建寅月為歲首 亦解 醫藥卜筮占相之術 有投壺 樗蒲等雜戲 然尤尚奕碁 僧尼寺塔甚多 而無道士 賦稅以布絹絲麻及米等 量歲豐儉 差等輸之 其刑罰：反叛 退軍及殺人者 斬；盜者 流 其贓兩倍徵之；婦人犯姦

者 沒入夫家為婢 婚娶之禮 畧同華俗 父母及夫死者 三年治服；餘親則葬訖除之 土田下濕 氣候溫暖 五穀雜果 菜蔬及酒醴肴饌藥品之屬多同於內地 唯無駝驢騾羊鵝鴨等 其王以四仲之月 祭天及五帝之神 又每歲四祠其始祖仇台之廟

自晉 宋 齊 梁據江左 後魏宅中原 竝遣使稱藩 兼受封拜 齊氏擅東夏 其王隆亦通使焉 隆死 子昌立 建德六年 齊滅 昌始遣使獻方物 宣政元年 又遣使來獻

隋書

百濟之先 出自高麗國 其國王有一侍婢 忽懷孕 王欲殺之 婢云：「有物狀如雞子 來感於我 故有娠也」 王舍之 後遂生一男 棄之廁溷 久而不死 以為神 命養之 名曰東明 及長 高麗王忌之 東明懼 逃至淹水 夫餘人共奉之 東明之後 有仇台者 篤於仁信 始立其國于帶方故地 漢遼東太守公 孫度以女妻之 漸以昌盛 為東夷強國 初以百家濟海 因號百濟 曆十餘代 代臣中國 前史載之詳矣 開皇初 其王餘昌遣使貢方物 拜昌為上開府 帶方郡 公 百濟王 其國東西四百五十里 南北九百余里 南接新羅 北拒高麗 其都曰居拔

城 官有十六品：長曰左平 次大率 次恩率 次德率 次杆率 次奈率 次將 德 服紫帶；次施德 阜帶；次固德 赤帶；次李德 青帶；次對德以下 皆黃帶；次文督 次武督 次佐軍 次振武 次克虞 皆用白帶 其冠制並同 唯奈率以上飾以銀花 長史三年一交代 畿內爲五部 部有五巷 士人倨焉 五方各有方領一人 方佐貳之 方有十郡 郡有將 其人雜有新羅 高麗 倭等 亦有中國人 其衣服與高麗略同 婦人不加粉黛 女辮發垂後 已出嫁則分爲兩道 盤於頭上 俗尚騎射 讀書史 能吏事 亦知醫藥 蓍龜 占相之術 以兩手據地爲敬 有僧 尼 多寺塔 有鼓角 篳篥 箏 竽 簾 笛之樂 投壺 圍棋 樗蒲 握槊 弄珠之戲 行宋《元嘉曆》以建寅月爲歲首 國中大姓有八族 沙氏 燕氏 刀氏 解氏 貞氏 國氏 木氏 苗氏 婚娶之禮 略同于華 喪制如高麗 有五穀 牛 豬 雞 多不火食 厥田下濕 人皆山居 有巨栗 每以四仲之月 王祭天 及五帝之神 立其始祖仇台廟于國城 歲四祠之 國西南人島居者十五所 皆有城邑 平陳之歲 有一戰船漂至海東 舂牟 羅國 其船得還 經於百濟 昌資送之甚厚 並遣使奉表賀平陳 高祖善之 下詔曰：「百濟王既聞平陳 遠令奉表 往復至難 若逢風浪 便致傷損 百濟王心跡 淳至 朕已委知 相去雖遠 事同言面 何必數遣使來相體悉 自今以後 不須年別入貢 朕亦不遣使往 王宜知之。」使者舞蹈而去 開皇十八年 昌使其長史王 辯那來獻方物 屬興遼東之役 遣使奉表 請爲軍導 帝下詔曰：「往歲爲高

麗不供職貢 無人臣禮 故命將討之 高元君臣恐懼 畏服歸罪 朕已赦之 不可致 伐」厚其使而遣之 高麗頗知其事 以兵侵掠其境

昌死 子余宣立 死 子餘璋立 大業三年 璋遣使者燕文進朝貢 其年又遣使者王孝鄰入獻 請討高麗 煬帝許之 令覘高麗動靜 然璋內與高麗通 和 挾詐以窺中國 七年 帝親征高麗 璋使其臣國智牟來請軍期 帝大悅 厚加賞錫 遣尚書起部郎席律詣百濟 與相知 明年 六軍渡遼 璋亦嚴兵於境 聲言 助軍 實持兩端 尋與新羅有隙 每相戰爭 十年復遣使朝貢 後天下亂 使命遂絕

其南海行三月 有舩牟羅國 南北千餘里 東西數百里 土多麋鹿 附庸於百濟 百濟自西行三日 至貊國云

付録4 正史の新羅条

梁書

新羅者 其先本辰韓種也 辰韓亦曰秦韓 相去萬里 傳言秦世亡人避役來適馬韓 馬韓亦割其東界居之 以秦人 故名之曰秦韓 其言語名物有似中國 人 名國爲邦 弓爲弧 賊爲寇 行酒爲行觴 相呼皆爲徒 不與馬韓同 又辰韓王常用馬韓人作之 世相係 辰韓不得自立爲王 明其流移之人故也；恒爲馬韓所 制 辰韓始有六國 稍分爲十二 新羅則其一也 其國在百濟東南五千餘里 其地東濱大海 南北與句驪 百濟接 魏時曰新盧 宋時曰新羅 或曰斯羅 其國小 不能自通使聘 普通二年 王募名秦 始使使隨百濟奉獻方物

其俗呼城曰健牟羅 其邑在內曰啄評 在外曰邑勒 亦中國之言郡縣也 國有六啄評 五十二邑勒 土地肥美 宜植五穀 多桑麻 作縑布 服牛乘馬 男女有別 其官名 有子賁早支 齊早支 謁早支 壹告支 奇貝早支 其冠曰遺子禮 襦曰尉解 袴曰柯半 靴曰洗 其拜及行與高驪相類 無文字 刻木爲信 語言待百濟而後通焉

隋書

新羅國 在高麗東南 居漢時樂浪之地 或稱斯羅 魏將毋丘儉討高麗 破之 奔沃沮 其後復歸故國 留者遂爲新羅焉 故其人雜有華夏 高麗 百濟 之屬 兼有沃沮 不耐 韓獫之地 其王本百濟人 自海逃入新羅 遂王其國 傳祚至金真平 開皇十四年 遣使貢方物 高祖拜真平爲上開 府 樂浪郡公 新羅 王 其先附庸於百濟 後因百濟征高麗 高麗人不堪 戎役 相率歸之 遂致強盛 因襲百濟 附庸于迦羅國

其官有十七等：其一曰伊罰幹 貴如相國；次伊尺幹 次迎幹 次破彌幹 次大阿尺幹 次阿尺幹 次乙吉幹 次沙咄幹 次及伏幹 次大奈摩幹 次 奈 摩 次大舍 次小舍 次吉土 次大烏 次小烏 次造位 外有郡縣 其 文字 甲兵同於中國 選人壯健者悉入軍 烽 戍 邏俱有屯管部伍 風俗 刑政 衣服 略與高麗 百濟同 每正月旦相賀 王設宴會 班賚群官 其 日拜日月神 至八月十五日 設樂 令官人射 賞以馬布 其有大事 則聚 群官詳議而定之 服色尚 素 婦人辮發繞頭 以雜彩及珠爲飾 婚嫁之 禮 唯酒食而已 輕重隨貧富 新婚之夕 女先拜舅姑 次即拜夫 死有棺 斂 葬起墳陵 王及父母妻子喪 持服一 年 田甚良沃 水陸兼種 其五 穀 果菜 鳥獸物產 略與華同 大業以來 歲遣朝貢 新羅地多山險 雖 與百濟構隙 百濟亦不能圖之

Part III

Part III 序	2
6. 高句麗の王統	8
6.1. 高句麗概観	8
6.2. 正史から	14
6.3. 高句麗の王統	26
7. 百済の王統	37
7.1. 高驪略有遼東 百済略有遼西	40
7.2. 正史による百済の王統	48
7.3. 百済の王統	57
7.4. 修正系譜	64
7.5. 百済の成立	68
8. 新羅の王統	76
8.1. 正史の記事（新羅の出自を主に）	77
8.2. 新羅本記の王統（3つの姓）	85
8.3. 新羅追考	97
インテルメディオ（Part II・Part III あとがき）	101
付録1 三国史記の各国の初代王の前文	104
付録2 隋書以前の正史の高句麗条	109
付録3 隋書以前の正史の百済条	131
付録4 隋書以前の正史の新羅条	142